

# 沖縄の民衆と差別

## 西里喜行氏に聞く(2)

今西 一 ●小樽商科大学名誉教授

大瀨郁子 ●琉球大学人文社会学部准教授

石川亮太 ●立命館大学経営学部教授

編

本稿は西里喜行氏のインタビュー記録の第二弾であり、前号に続くものである。前号に掲載したのは二〇一六年二月に実施したもので、第二次大戦末期に始まる竹富島での幼少期の記憶から、那覇での高校時代、京都大学での「留学」時代までについてお聞きした。今号に収録するインタビューは同年一月二十七日に実施したもので、一九六九年に沖縄に帰られてからの経験を伺う予定であったが、会話の流れから、まずその前に遡って記憶をたどり直すこととなった。時期としては一回目のインタビューと重なるものの、一九五〇年代の先島・沖縄本島での生活や、一九六〇年代の京都の学生運動における沖縄問題の扱いなど、一回目では詳しく触れられなかった部分も含まれており、興味深い記録となっている。

京都大学での「留学」を終え、沖縄に戻られた後については、『那覇市史』『沖縄県史』の編纂事業についてまず語られている。この二つは、戦後の沖縄史研究における重要な画期をなすのと同時に、東洋史の研究者として出発した西里氏が本格的に沖縄史研究に足を踏み入れる契機にもなった。その過程で起きた、明治政府の沖縄政策をめぐる「西里—安良城論争」にも話が及び、これが学説上の争いに止まらない、沖縄の歴史的自立性をめぐる視角を反映した論争であったことが明らかにされている。

このことと関係して、インタビューの後半では、西里氏が主な研究対象としてきた一九世紀末の国際関係を通じて、東アジア史のなかでの沖縄の位置づけについての考えが語られている。ここでは、沖縄の主体性・自立性が強調されると同時に、沖縄に内在する地域差別にも触れられていて、西里氏が到達した複眼的な歴史認識が詳しく語られている。(石川亮太)

### 一 沖縄史研究の歩み

#### (一) 離島差別の問題をめぐって

今西 前回は六〇年代まではお伺いしたんですけどね。それで、卒論の話とか修論の話までお伺いして、今回は六九年に沖縄に帰ってこられたから後ですよね。

西里 うん。

今西 七〇年代に『那覇市史』<sup>①</sup>とか『沖縄県史』<sup>②</sup>の編纂事業に参加して、琉球・沖縄史の研究に従事されるので、ちよつと逆に中国研究から遠ざけられたわけですけども。これは、『沖縄県史』はどなたから誘われたんですか、先生のほうに。

西里 僕が沖縄へ帰ったのが一九六九年だから、六九年の三月に帰って、すぐ四月から『那覇市史』編纂室のほうに嘱託として入ったんで

すよ。

**今西** 『那覇市史』ですな。

**西里** 歴史編集室だったか、名前はいろいろ変わったんだけど(笑)。

**今西** 大学に入る、いや、戻られる前に、少しここへ就職されたんですね。

**西里** いやそうではなくて、大学院終わる前に共同研究で一応『近代沖縄の歴史と民衆』という論文集を出す企画があつて、それは僕がまだ大学院在学中で、その中心になったのが金城正篤さんだったわけですが、僕は八重山出身という事で、先島の問題を歴史学のほうからアプローチするということで「沖縄近代史における本島と先島」、副題として「差別の構造と克服主体の形成」と、かなり大上段に構えた論文を書いた。それが沖縄史に向かう本格的なデビュー作であつたかと思う。

时期的には、京都から沖縄に戻ってきて、その直後に『歴史と民衆』が出版された。その準備のために、若手を中心に沖縄近代史を対象とした共同研究を、二、三年かけてやっていて、共同研究の参加者がそれぞれのテーマで論文を書き上げ、まとめて論文集として刊行したというわけ。その前後の六九年ころから、沖縄差別というのが政治的にもテーマになつていて、七二年の返還協定の問題が論じられる中で、第三の琉球処分とか、そういう議論が頻繁に論じ

られるようになった時期に出版したわけですよ。

ただ、あのころの差別問題の議論は、ヤマト(大和)対ウチナー(沖縄)、という二項対立の議論であつたけれども、僕はそういうのはちよつと自分の体験から違和感があつてね。沖縄の中にだつて、ウチナーンチュとエーマンチュ(八重山の人)の間に(笑)。

**今西** それはそうですね。

**西里** 沖縄人(ウチナーンチュ)と宮古人(メークンチュ)の間でも。

**今西** うん。

**西里** だから宮古・八重山というのは、また沖縄の中でも下層に置かれるという、そういう構造があるのではないかということで、歴史的にそれを少しほじくり返してみようというふうなつもりもあつただけども。

しかし、対象とする時期はあくまでも近代、近代沖縄の歴史と民衆ですから、近代が主な対象になつただけだね。近代史の中で、そういう沖縄本島と先島の制度的差別というのが、前近代からどういうふうに継承され、利用され、人々の意識の中にまで入り込むのかという問題を扱つたんですが、当時は使える史料が非常に限られていたから、なかなか大変で不十分な考察に止まっています。

ただ、当時の問題意識としては、今でもまだ残っているのかも知らんけど、僕らが沖縄に

行くとか、沖縄から帰ってきたとか言う時、沖縄というの自分たちの外にある対象物、客観的な対象物であつて、自らがそこに一体化している、その一構成員であるという意識は、まだないんだよね、あの当時は。

**石川** ああ、なるほど。

**西里** それというのも、僕は竹富島という小さな島の中で中学校三年まで暮らしたから、竹富島がまさに全世界だったんですよ。でも、竹富から海を隔てて数キロ先の石垣島では、電灯がきらきら輝いていて、そこは近代社会だというようなイメージで見えていた。

他方で、夏休みなどには竹富島にも石垣島(四ヶ、シカと言つていた)から親戚関係の生徒たちも遊びに来ることがあつたから、彼らからいろんな最新の近代的な情報を仕入れるということもあつただけだ。だけど、やっぱり彼らとの日常の会話あるいは対応の仕方等では差別的に対応されることがあつて、一段下に見下すんだよね(笑)。

例えば、僕が一番こたえたのは、俳優の名前とか女優の名前という情報というのは、やっぱり石垣にいる人たちが最新の情報を持つているわけですよ。

**今西** 石垣にも映画館もあつたんですね。

**西里** 石垣には映画館あつたよね。何て言つたかな。今でもあるんですか。



いまにし・はじめ◎立命館大学大学院文学研究科  
修士課程修了。農学博士(京都大学)。一九九六年・  
二〇〇一年、韓国忠南大学交換・客員教授。著書  
に『近代日本成り立ちの民衆運動』(柏書房)、『近代  
日本の差別と性文化』(雄山閣)、『メディア都市・  
京都の誕生』(同)、『文明開化と差別』(吉川弘文館)、『  
遊女の社会史』(有志舎)、『近代日本の地域社会』  
(日本経済評論社)ほか多数。

大瀧 今はもうないんじゃないですか。映画館はもうなくなっちゃったんですよ(当時)。二〇一八年にミニシアターゆいロードシアターが開館)。

今西 竹富でも雑誌とかそういうのは手に入ってたんですかね。

西里 雑誌も、だから石垣まで行って買ってちゃんと読めない。石垣港の埋め立ての前で竹富の人が本屋をやっていた。古見商店という。

今西 どんな雑誌があったんですかね。

西里 どんな雑誌かというのと。

今西 ちよつと後だと『平凡』とか『明星』とか。

西里 それもあつたはずだけど、僕は当時はやってた『冒険王』というのがある。

今西 『冒険王』、漫画ですね？

西里 漫画だね。で、そんなのは、やつぱり自分で小遣いかせいで買ってもらおうということを手に入れていたね。

今西 漫画雑誌が出だしたころですね。だから

『冒険王』とか『少年(漫画少年)』とか。西里 そうそう、そうそう。

今西 あ、そうか、そこにも、そうですね、『少年』とかいろんな漫画、『冒険王』には映画スターの写真とか出ていましたよね。中村錦之助とかね、東千代之介とかね、あのころのね。

西里 そういふもので情報は入手するわけ。だけど、やつぱり石垣島にいる人たちは早いわけよ、情報のつかみ方が。こんなものも知らんのかと言わんばかりの言い方で対応するから(笑)。

今西 少年ドラマもはやっていましたね、あのころ、そういえば、『笛吹童子』とか、『赤胴鈴之助』とか。

西里 うん、そんなのがあつたね、僕はあのころは、俳優というのは女優と男優の区別があるということに分かんから、誰でもかかれでも俳優と言つてね、石垣の連中は、あれは、女優は女優だよと区別してるんだよ(笑)。

大瀧 ああ、そうか。

今西 そこらの文化が全然やつぱり違うんですね。

西里 うーん、いや、伝わり方がね、早いか遅いかの問題だと思っただけだね。電気もないし、水道もないし、

車もないしき、そういう全くの原始生活を少しはみ出したような所だよ。それは、もうやむを得ないところもあつたんですね。

今西 で、映画とかそういうものを見られたのですか。

西里 年に一回行ければいいほうだったね。そうそう、小学校五年、六年ぐらいからは修学旅行で石垣まで行くという機会があつて、中学校に入ってから、石垣をぐるっと回つたんよね。伊原間(14) 辺り回つて。

大瀧 まだ、あのトンネルないころですものね。

西里 ない、ない。危なっかしいところを、海岸沿いの道を回つて。ようあんな所にも人が住んでると思つただけだね(笑)。

今西 それは戦争もあつたですから貧しかったでしょうね。

西里 そうそうそう。戦争の後でもあつたし、また当時の琉球政府が八重山移民政策をとつていて、沖縄本島からも宮古島からもかなり移民が入つたんだよね。だから、裏石垣(15) っていうのはだいたいそうよ。

大瀧 そうですよ。

西里 彼らが開墾しながら集落を築いたというのかな。

今西 沖縄差別の中では、そういう離島と本島との差別というのは体験されたわけですよ。

う微妙な差別というのは、離島が多いからね。  
**今西** それは私も、島を幾つか、竹富とかを回って、やっぱり違いに感心しましたけどね。

**西里** そうそう。ただ、あのころから沖繩の基地建設が大々的に起こって、かなりみんな、そこにまた吸収されるということがあったね。

**今西** 収容所つくって土地を取り上げるといいう、だから、かなり八重山からも沖繩本島にも、大瀆 基地建設のために労働者として出稼ぎに出る。

**西里** 出稼ぎ目的の人が多かったようだね。八重山の中では食っていけないから。竹富島なんかはもう、こんな小さな島に二千人超える人口がひしめいていたわけやね。だから、もう何とこのか、耕すべき畑なんていうのは、もう耕しつくされているわけやね(笑)。ほんで、石だらけの、石がっぱらーと言っていたけど、いくら耕しても石しか出ないような所をなんとか開墾して畑にするんだよね。それでも、もう食っていけないから、台湾から帰って一年ぐらいたら今度は沖繩本島に行くとかね、そういう人が多かったです。

だけど、戦争終わって復員して来る人や台湾などから引き揚げて来る人が多かったから、竹富島の居住人口は五〇年代の前半には二〇〇〇名を超えていました。僕らの学年でも、入学し

たのが一九四七年か、八年ぐらだから、このころがピークなんだよね。もう一クラス八〇名ぐらいいいたからね、廊下にも全部机を並べて(笑)。

**今西** うん、一クラス八〇人は多いですね。  
**西里** うん。そんな過密教室で授業をやっているような状況で。

**今西** われわれでも五〇人の世代なんですけどね。プレハブ校舎まであった時代なんでね。  
**大瀆** 団塊の世代ですものね。

**今西** 団塊の世代です。  
**西里** だけど、だんだん沖繩島などへの出稼ぎに行く人が増えて、竹富島を引き揚げるといふことになるんだ。僕なんかも五〇年代の前半、僕が島を出たのは五五年だからね、そのころまでは相当数の人口を抱えていて、食うや食わずの生活だったんだけど。

で、沖繩でのいろんな動きに対応して出ていく人が多いということがあって、その時に、だから沖繩に行く、ウチナー(沖繩)に行くといふのが一つのブームになっていて、沖繩に行くときにも、今なら石垣港には直接岸壁に接岸できるようになっていたが、当時は、竹富島と石垣島のちょうど真ん中が深いから、そこに大型船が停泊していて、いったん石垣に行つて、また石垣からはしげ船に乗って、それから一昼夜かけて那覇にといふような航海でしたからね。

それで、僕が乗って行つたみどり丸というのは、これ一番大きかったんだね。後に確か久米島航路に用いられて、久米島から那覇への航海途中で沈没したはずだ。

**今西** ええ、みどり丸事件<sup>18</sup>ってありましたね。  
**西里** あれに乗って行つたんだ。そのころは八重山から沖繩に行くというのは、外国に出るような感覚でした。僕は、もう兄弟や親族が既に先に沖繩に行っているから、彼らを頼って行つたわけだけでも。要するに、高等学校に進学するためには誰かに頼らないとできないという事情があつて、石垣には誰もいなかったんだよね、頼れる人が。で、沖繩に行かざるを得ない。だから、八重山高<sup>19</sup>を飛び越えて、すぐ。

**大瀆** 那覇高<sup>20</sup>へ。  
**今西** 那覇へね。

## (二) 那覇での生活

**西里** うん、那覇高に行つたんだけど、その前にいったん那覇中学校。三年の二期からは那覇中学校に行つて、それから那覇高にというコースをとつたんだが。やはり那覇、沖繩に行つてみたら、今度はまた言葉が通じないのよね、あんまり(笑)。

**大瀆** そうですね。

**今西** 違いますよね。

**西里** あのところはもう生徒たちも、那覇高に

入った生徒たちも日常語は沖繩語(ウチナーグチ)をかなり使っていたからね。それで、沖繩語を使い出すと、こっちは分からんから、聞き返さなきゃいかんというようなことがあつたりして。

**今西** 授業を受けても大変ですね、それじゃあ、言葉がよく通じない。

**西里** いや、授業は日本語、いわゆる標準語だよ。

**今西** 標準語ですか。先生は全然方言を使わないうんですか。

**西里** 方言使う先生は、そんなにいなかった。叱るときなんかは方言で叱っていたけど。叱られていても何を言っているか分からないから、あんまり、こっちは通じなかった。だから、生徒たちの中にもエーマンチュ、メークンチュという言い方で、八重山のこの蛮地から来た、まさに土人だと言わんばかりの言い方をしよるんで(笑)。

**今西** やつぱりそういう目で見られたんですか。

**西里** そうそう。一年ぐらいはそんな状態が続いたんだよ。

**今西** 土人だという目で。

**西里** だけど、一年ぐらいたつと、だんだんこつちも、もう何言ってるか分かってくるし、悪口言われたら言い返すというような対応ができるようになって、それから、あまり言われなくなつただけ。

**今西** まだ文化の中心はラジオでしょう。ニュースとかはほとんど。

**西里** そうそう、ほとんどラジオ<sup>①</sup>。ラジオは持っている人もいるし、持つてないほうが多かったからね。持つてている人は情報にアクセスする機会が多いし、やつぱり文明化というのは、そういうところからくるという感じではあつた、うん。

**今西** やつぱり着るものとか食べるものとか、だいぶ相違があつたんですか。先生たちと那覇の子どもたちとは。

**西里** ええ、それはありますよね。いや、那覇では、もう相当アメリカナイズされ始めていたから。

**今西** ああ。

**大瀨** うん、靴を履いているとかですかね。

**今西** ジーパンとか運動靴とか、みんな履いてくるといふ。

**石川** アメリカ人は、竹富とか石垣ではご覧になつたことがありますか。

**西里** 竹富、石垣では直接はないけどね。

**石川** ああ。

**西里** イギリス人が戦争末期に、飛行機が撃墜<sup>②</sup>されて逮捕されて島に来て、みんなが、わあつと集まって見物しているというような状況はあつた。それ以外は外国人というのは直接には目に触れる機会はなかつた。

**今西** 那覇のほうではもうジャズとかいろんな

アメリカの文化が入ってきていたわけでしょう。**西里** そうそうそう。だから、映画館も国際通り<sup>③</sup>には幾つかあつたですね。国映館とか沖映館とか。だから、映画を観ることができただけでも相当違うし。

**今西** やはり占領軍に影響されている学生は、かなりいましたか？ 生徒たちの中にそういう。

**西里** いや、直接影響された学生と……

**今西** ボーイスカウトに入るとか、そういうよ

うな。

**西里** あ、それはあつたかも知らん。うん、それはあつたかも知らん。学校の中にも、何だ、アメリカ軍の宣伝工作用の、何て言つたかな、『守礼の光<sup>④</sup>』か。

**大瀨** 『守礼の光』、雑誌ですね。

**西里** 『守礼の光』とかね。あと幾つかあつて、それが無料で全部配られるんだよ。それを読んで情報を得るといふ。宣伝工作で、瀬長亀次郎

なんかはもう、イラストで蛸にされちゃつてさ(笑)。共産主義は、こういうふうにして手を

浸潤してくるといふ、そういう宣伝をかなり

やつていたから。それはありましたけれども。

**今西** 那覇では英語教育は、もうやり出して

たんですか。

**西里** うん、それはもう高等学校から、もう全

部、英語はやつていたし。中学校も英語やつて

いたよな、うん。

**今西** その当時は外国人の教師は来ていたんですか。ほとんどいなかったんですか。  
**西里** 直接僕は外国人教師の授業を受けたことはないけども、一人、二人、入ってて、クラスを受け持っているというふうなことはあつたはずなんだけど、僕は直接体験してない。

### (三) 京都時代

**今西** ちよつと話を戻しますけど、そういう自分の体験の中で、沖繩の中でも本島と離島のいろんな差別の経験をする。沖繩の持つ差別構造というのは、ずっと関心があつたということと、それから返還協定が出てきますよね。だから、それで沖繩差別という問題が叫ばれる。

**西里** そうそう。

**今西** そういう時にちよつと沖繩史へ行かれたわけですよ、研究の方向は。

**西里** そうそうそう。研究史の軌跡から言えば。だから沖繩史をやり出したのも、かなり遅いんですよ。もともとは中国史だったんで。

**今西** 中国史ですか。

**西里** で、中国史をやるうと志して京都に行ったというのも、これはもう、あのころの国費・自費制<sup>26</sup>という制度があつて、全琉（全琉球諸島）で選抜試験をやつて、そこから選抜して、どの学科には何名、どの学科には、と振り分けるわけ。当時、歴史学では二名か、二名選抜されて、

僕は京都へ行ったけども、一人は九州を選んで。その時に、高校の教諭で恩師の島尻勝太郎<sup>27</sup>先生から、京都に行つて東洋史を勉強してこいというふうなサジェスチョンがあつて。何でそんなサジェスチョンをしたか分からんけど、京都の中国学、中国史というのは、恩師のような世代の人たちにはかなり、まだ大きな影響があつたみたいで。

**今西** それは内藤湖南<sup>28</sup>以来の伝統のある学部ですからね。

**西里** 京都に行くんだつたら東洋史を勉強しなさいというふうな話で、東洋史をやることになつた。僕の本音としては、むしろ西洋史をやりたかつた（笑）。というのは、フランスの「自由、平等、博愛」というふうな、あの理念というか。

**今西** フランス革命の研究ですね。

**西里** そうです。それに引きつけられた面があつたから。だから迷つたんだよね、西洋史にするか、東洋史にするか。

**今西** 行く対象というのは京大（京都大学）でないといけないんですか。

**西里** ええ、だから、京大に割り振るといふのは、もう琉球政府のほうでやるから。一応、希望は出させた。僕は、希望は京都だということを出したんで、すぐ入つたんですけど。京都。  
**今西** 金城正篤さんは幾つ違うんですか。

**西里** あ、金城さんはずっと後から、大学院の時に京都に來た。彼はいったん就職して、現職から大学院に來たんで、年は四つ、五つ違ふけれども、京都では学年は一つ上という感じで。

**今西** そうですか。大学院からのお付き合いなんですか。

**西里** そうそう、大学院から。

**今西** 京大の学部時代は誰と仲良かったんですかね。

**西里** 京大の学部はいろんなやつがいたけど、広川君がそうだな、一期下だったな。都出（比呂志）<sup>29</sup>君もそうだ。

**今西** ああ、広川禎秀<sup>30</sup>さんが。

**西里** それから、同期には吉田君がいたな、吉田君は今、何だ、井口か。

**今西** はい、井口和起<sup>31</sup>さんです。

**西里** うん、彼が同期にいて。

**今西** 村田修三<sup>32</sup>さんも？

**西里** うん、村田修三さんは三つ上か、二つか三つぐらい上や。狭間直樹<sup>33</sup>さんもそうだ。クラスは違うけど、鳥越俊太郎<sup>34</sup>さんは同学年入学の同期生だよ。

**今西** 鳥越さんと同期ですか。

**西里** そうそうそう。

**今西** じゃあ。

**西里** いや、同期だけでも、彼は相当、横道そ

れて、あちこち何しとるから、卒業はずつと後のはずだね。

今西 宮城公子さんとか、あの辺と学年的には近いんですか。

西里 宮城公子さんは、ちよつと上だな。

今西 ちよつと上ですか、宮城さんのほうが。

西里 うんうん。国史研究室には名村さん、名村泰子さんは今何と言ったかな。

今西 はあ、橘（現・京都橘大学）の。

西里 中世女性史をやっている人で、テレビでも時々お目にかかる。

今西 そうそうそう。田端さんです。

西里 あ、田端さん（笑）。うん、田端泰子。

今西 橘女子大の学長でしたね。

#### (四) 沖繩返還闘争

西里 同期の友人で特に親しかったのは、津崎君、津崎幸博君だが、彼は卒業後直ぐ教職に就いたけど、白川静の娘さんと結婚して、白川史学を裏方でずつと支えていた人で、今でも頑張っていますよ。そのほか、同期には渥美文夫君というのがいたな。彼は何か北小路敏らの属した共産党、共産主義者同盟か。

今西 ええ、ブントですよ。

西里 ブントか。ブントで活動していて、革命家気取りだったな。

今西 北小路敏さんも学年的には近いですね。

西里 北小路敏は四期、三期上か。僕は彼の演説はよく聞いていたのよ。そう、三期、四期ぐらいの差だね。

今西 なかなか演説うまかったらしいですね。

西里 うまかった、うまかった。彼には、みんな魅了されていたんだけど（笑）。

今西 大秀才で、紫野高校から京大経済へ行つて。紫野高校時代に『資本論』を全部読み切つたとかいう伝説のある人物で（笑）。

西里 そうだね。

今西 そうすると、また六八年ぐらいに戻りますけれども、やっぱりあれですか、沖繩差別を全面に立てて、やっぱり沖繩史をやらんといかんということ、その時ぐらいに感じられたんですか。

西里 僕は在学中、学生、院生のころには沖繩出身の学生をまとめる役をさせられていたから。沖繩県学生会事務局長なんですね。それで、やっぱり沖繩返還運動というのは、何ていうのかな、学生生活のむしろ主軸になっていくような感じでしたね。

沖繩問題が全国的なイシュー (Issue) として政治的テーマになってきたのは、やっぱり六〇年代に入ってからだね。安保闘争の中で意識され始めたんだけど。安保闘争、僕は五九年から六〇年にかけての全国統一行動というのに、あれは三十何回ぐらいやったのかな。欠か

さず参加して。

今西 でも、どちらかというと、沖繩問題とか、それから六五年の日韓闘争の時もそうですけど、そういう民族問題、弱かったですよ。

西里 そうそう、だから、その中で違和感を持つようになった経緯というのもあるんだけど、確か安保闘争の中で沖繩問題というのは、一応、意識をされながらも、位置付け方が非常に弱いんだよね。それはもう、返還運動はあんたらがやっつけと言わんばかりにね、やや軽視される状況があつて。

だから、沖繩は、いわゆる安保の中の何ちゅうのかな、日米共同防衛というような安保の適用範囲をどうするかという問題が議論されて、沖繩を適用範囲に含めるといのが政府の中でもあつたようで、むしろ運動の側は沖繩を含めたら、それこそ戦争に巻き込まれる機会が増えるということ、かなり猛反対していたという時期だね。

だけど、この適用範囲から外されるということは、やっぱり日本とは違ふのかなという、そういう意識が確かに芽生えちゃったということもあるわけで。その中で、じゃあ、どう位置付けるのかということがよく見えなかったのよ、あの時点ではね。

今西 そうですね。

西里 だけど、適用されるか、されないかに関

わらず、沖繩はこのままではいかんということ  
で返還ということに集中したわけだ。日本本  
土から言えば返還、沖繩から言えば復帰とい  
うことになって、一九六〇年に復帰協（沖繩県祖  
国復帰協議会<sup>④</sup>）が結成されるのかな。それで、  
復帰協とタイアップしながら、四二八か、四  
二八の海上大会<sup>⑤</sup>、そこに代表を送り込むとい  
う仕事ばかりやっていたね、あのころは。

**今西** だけど、安保闘争の時でも、やつぱり主  
軸が議会制民主主義を守れという、日本の民主  
主義の危機だというのが安保闘争の課題で、沖  
縄問題をそれほど明確に意識してやっていたと  
は、とても思えない動きだったです。

**西里** うん。

**今西** それから、もともとやつぱりそういった  
沖縄の問題をどう位置付けるかというのは、あ  
の時、運動の中に混乱がありましたよね。

**西里** ありましたね。

**今西** 運動の中にもね。

**西里** 沖縄問題で中央集会というのを開いて  
も、せいぜい五百人ぐらいしか集まらんとい  
うふうな何でしたからね。

**今西** 六五年の「日韓条約（日韓基本条約）」  
の時でも、ほとんど、やつぱり朝鮮問題とい  
うのはちゃんと認識されてなかったですよ。

**西里** そうそう。だから、日韓問題で何が問題  
になっているかというのも分からなかったよね。

**今西** 何か日韓で密約結んで、何かいろいろ悪  
いことしとったという話で集まっているわけ  
で。あの頃は、朝鮮に対する戦争責任の問題だ  
とか、戦後責任の問題だとか、そういうこと  
について、ちゃんとした議論はやってなかった  
すよね。

**西里** だから、そういう弱さを持ちながら、一  
応、全国統一行動みたいなかたちがあったから、  
それに乗っかって何とかきただけど、結局そ  
れも分裂しちゃったよね、途中で。

**今西** うん。安保の後も何か非常に政治的な対  
立のほうが目立って、あんまり大衆運動として  
発展しなかったですよ、はつきり言ってますね。

**西里** そうそう。

**今西** そこがね。

**西里** それぞれのセクト主義で（笑）。

**今西** うん、仲悪いからみたくないな（笑）。民青（日  
本民主青年同盟<sup>⑥</sup>）と社青同（日本社会主義青年  
同盟<sup>⑦</sup>）とかで、いろいろ対立のほうを中心になっ  
て。

**西里** リーダーシップをめくつても何していた  
時期だからね、うん。

**今西** 民族問題なんか挙げると、ばかにされた  
傾向もあったしね。

**西里** そうそう。何で今ごろ民族主義かという  
ような。インターナショナルリズムか、ナシヨナ  
リズムかの対抗軸でしか考えないというような。

**今西** 六〇年代は基地闘争なんかやっていて  
も、社青同や何かがある、「みんなみんな（＝  
民青）のきちぎち（＝基地）ぱー」とか言って、  
基地闘争をやっているばかか今ごろいるとい  
うような、そういう感じの雰囲気のほうが強かっ  
たですからね。

**西里** そうそう（笑）。

**今西** だから沖縄問題は難しかったですよ。  
やつぱりずっと。

**西里** 僕が京都に出てきたのが五九年で、帰っ  
たのが六九年だから、その間に沖縄でも相当大  
きな変化があったんだけど、僕はだからその変  
化には触れる機会にはなかったんだよ  
ね。だけど、京都におれば、沖縄というのがよ  
く見えるというのかな、むしろ客観化して見れ  
ば、ということがちよつと分かったんだけど。

だから、あのころに、宮森小学校への米軍  
機の墜落事件<sup>⑧</sup>というのがあったりね。あれは何  
ていうのかな、ナイキ・ハーキュリーズ<sup>⑨</sup>（MINI-  
14: Nike Hercules）の持ち込みとか、そんな  
物騒な話とかね、核兵器<sup>⑩</sup>なんかも持ち込まれた  
というの、あの時期だと思っただけでも。そ  
ういう物騒な話は六〇年代に、むしろはつきり  
してくるというようなことがあったけれども、  
僕は京都からしか見てないし、四二八の海上  
交流大会に行った者、十数名のメンバーを県学  
生会から送り込むためのカンパ活動とかね、あ



るいは沖縄返還国民大行進というような名目でカンパを集めながら、京都の北のほう、丹波からずつと寒い時にき(笑)。

**今西** 京都の丹波、丹後ですね。

**西里** 旗持って行進したというような経験もあるけどね。

**今西** でも、あんまり沖縄問題って分からなかったんじゃないですか。

**西里** 理解されていなかったんだ、だから。

**今西** うんうん(笑)。

**西里** それで、がくつときて落ち込んだこともあるけどね。しかし、関心を持ってくれる人は持つてくれて、行進団を歓迎して自分でパンフを配るからと言って、もらいに来る人もいたにはいたけども、一般にはやっぱり「何じゃこれ」というような様子で見ているという状況。

**今西** うん。当時は、ぴんとこなかったと思うんですけどね。だから、瀬長さんが逮捕されたり、いろんなニュースは知っていたし、『民族の悲劇』というようなかたちで彼の書いたものとか高校時代は読んでいましたけどね。だけど、やっぱり沖縄問題が本当に分かっているかと言われると、それは難しいですよ、その当時は。

それと、沖縄をどうしたらいいのか、復帰なのか、そういう独立なのかという議論も出てきました。

**西里** そうそう、うん。あのあたりから、そう

いう議論がだんだんね、先鋭化してきたと思うんですよ。

**今西** 瀬長さんは復帰論の中心になってきますからね。

**西里** うん、だから瀬長さんも戦後の一九四〇年代の後半あたりには、かなり独立志向みたいな傾向を持ちながら、サンフランシスコ条約が締結されたのをきつかけにして、ずっと日本復帰というふうに傾斜していくわけでしょう。

**今西** うん。だから、民族独立運動みたいな概念が入ってきますからね。特に中国の影響が強く出てきますからね。

**西里** そうそう。

**今西** 当時の中国革命の毛沢東思想ですよ、簡単に言えば。それが非常に強く影響力を持つてくる。歴史学でもそうですからね。

**西里** うん。それはあるね。だけど、六〇年代の復帰協の結成あたりからは、主流はもう日本復帰ということになるんだね。で、それがいろんな事件を経て、六〇年代の後半にはベトナム戦争反対というようなかたちの反戦運動とか労働運動、あるいは農民運動なんかの影響も加わって。

**今西** ちよつと左翼が上げ潮になってくるんですよ。

**西里** そうそう。

**今西** だから、簡単に言えば革新自治体の形成

とかね、ああいうような、左翼運動というのが非常に上げ潮のムードが強くなってきて、当時、何か民主的な政府ができるんじゃないかみたいな、そういうようなね、幻想とか、そういうのがかなり強く出てきますからね。

**西里** 全国的にそういうところがあつたんだろうね、あればね。

**今西** そうですね。いや、革新自治体が大きいですよ、やっぱりね。蛭川(虎三)<sup>33)</sup>さんだけでなく黒田(了一)<sup>34)</sup>さんとか美濃部(亮吉)<sup>35)</sup>さんとか、みんな全国でそういう革新自治体が生まれてくるし。

**西里** 蛭川さんが長いこと京都で頑張っていたというのも一つの要因ではあつたんだろうね。そうそう。その後、美濃部、黒田、ああいうような革新知事が出てきたから、うん。

**今西** ええ。まあ、その、ちよつと考えが違うけど横浜の長洲一二さん<sup>36)</sup>とかね。そういう人たちが革新自治体を創り出してきますからね。当時、地方自治とか、そういう考え方も非常に強くなってくるし。

**西里** 飛鳥田(二雄)<sup>37)</sup>さんなんかも出てきたから。

**今西** うん、飛鳥田さんがその後を継ぎますけどね。横浜市長ですね。だから、そういう流れでちよつと上げ潮ムードだったんです。それと学園「紛争」がちよつと。だから、早いのは

六七年ぐらいから起こるんですけど、関東は六八年、六九年。関西は六九年ですよ、一番激しかったのはね、やつぱりね。

西里 うん、僕はちょうど大学院終わって沖繩へ帰ろうという直前あたりね。

今西 京大、立命（立命館大学）あたりがね。

西里 京大の時計台攻防というのがあって（笑）。

今西 法経一番教室の攻防というかたちで、それをどつちが取るかという（笑）。

西里 いや、だから僕は六九年の三月に引き揚げたけれども、六九年の年明け前後には相当激しかったね、あれはね。

今西 あれは激しかったですね。もう火炎瓶が飛び交っていましたよ。

西里 ほんま戦争やつてる感じでした（笑）。

今西 うん。

#### (五) 沖繩へ帰る

石川 先生はやつぱり沖繩にはいつか帰ろうという気持ちで京都に來られたんですか。

西里 一応、帰還義務というのがあったんでね。

石川 ああ、そうですね。

西里 だけど、文系には、そんなに強い強制はなかったから。特に理系、医学系なんかは相当強い規制があつて、帰らなかつたら奨学金を打ち切るとかいう、そういうこともあつたみたいだけど、僕らには、そんなに強い圧力はなかつ

たんですけど、一応は帰るという前提はあつたんですよ。

石川 ご自身のお気持ちの上では。

西里 うん。だけど、ちょうど帰る前後に、沖繩でもかなり政治の季節になり始めていた。教公二法闘争（教公二法阻止闘争事件）<sup>⑧</sup>を契機にして、自治権の獲得というような主席公選要求<sup>⑨</sup>とか、そういうものが。

今西 返還協定反対闘争という。

西里 そうそう、それが結び付いたわけだよ、返還協定問題と。だから、相当盛り上がっている時期であつたし、京都にいても、あんまり学問の展望が開けそうにないというようなことがあつてね。図書館が使えなかつたんだよ、あのころは。図書館も全面封鎖されちゃつてさ。

石川 ええ。

今西 そうですね。あの時は、もう京大の図書館、全然使えなかつたですね。

西里 うん、使えなかつて、どうしようもないというような感じもあつたけど。

今西 沖繩へ戻つて就かれた職が那覇の。

西里 そうそう、那覇の市史編集室か。総務局だったかな（笑）。要するに非常勤というのか、今で言えば嘱託だな、嘱託。嘱託として入つて、その嘱託で入つた時の編集室長というのが、外間政彰<sup>⑩</sup>という有名な編集者なだけだね。

今西 外間さん。

西里 外間政彰という。で、彼は泊人（トマリ）ンチュ、現在の那覇市泊の出身）だったんで、女房が同じ泊人だということもあつてか、それで意気投合しちやつてさ、ぜひ来いということに。

今西 もう、その時は結婚されていたんですか。

西里 僕は帰つてから、すぐ結婚した。その直後に、嘱託として那覇市役所に入ったのはいいんだけど、相当こき使われてね、もう大変だったよ。

今西 自治体史の事務局つて結構つらいですよ。ね。

西里 つらい。嘱託だから、一分でも遅れたら一時間の賃金カットなんだよ。

石川 ああ。

西里 そのころ僕は結婚したばかりで、女房は教員だったが、八重山から沖繩本島中部の石川高校に転任したばかりだった。だから、石川と那覇の中間、具志川村（現うるま市）という所に間借りして、僕も具志川と那覇を往復することになった。具志川から那覇までのバスというのも早い時間に乗らないと出勤時間に間に合わないわけね。

大濱 そうでしょうね。

西里 ほんで、もう毎日戦争みたいな状態で、一分遅れたつて一時間賃金カットしよる（笑）。その上、ボーナスは出ないでしょう。もうほと

らんど、だから女房に食わせてもらつとつた。  
**今西** その時は、奥さんのひもだったわけですね。市史には、誰が研究者としては参加していたんですか。

**西里** 市史編集室にいたのは、山田義時さんとか、国吉鉄雄さんがいて、みんな嘱託だったよ。で、僕が入って嘱託三名。で、統括しているのは編集室長の外間政彰。で、事務担当の砂川さんがいて、五名体制でやつていたの。僕が入った当初は。

**今西** それ、前近代から近代まで五名でやるんですか。

**西里** そうそう。全歴史過程を網羅するという方針で。しかも、あのころは戦争の影響もあって史料が非常に少ない、史料の発掘が第一課題だというのが外間さんの方針だったもんで。それで、もう基礎史料になるのは、もう全部公開していこうということで、僕はだからすぐ入って、すぐ担当したのが薩琉関係史料<sup>④</sup>というものだったわけだ(笑)。これは『那覇市史』のね、前近代の資料編の第四だったか、何番だったかな、あれが最初の仕事だったね。

ところが、僕は大学では古文書はまともに読んでないわけや(笑)。やり直さんといかんわけ、もう最初から。で、自分で勉強しながら編集作業をやるといふかたちだったもんで、相当しんどかった。

**今西** 戦争で地方<sup>じなた</sup>の史料ってあんまり残ってないわけでしょう。

**西里** 残ってないと思つていたんだけどね、あちこちに案外あるんだよな、あるところには。

**今西** ああ、そうですね。

**西里** だから、それを集めて。もちろん沖縄だけじゃなくて、東京とか、あるいは大阪とかね、福岡とか、そういうところにいる沖縄出身者のところに若干残つてるところということで、編集室長は、だから、それを現地へ行つて集めてこいと(笑)。そういう仕事をやつていた。

**今西** 全国を回らないといけないですね。

**西里** 回らんといかん。室長の外間さん自身も山形辺りまで行つて、結構面白い史料を引っぱり出した。当時の新聞資料なんかもね。だから、相当貴重な史料が入ってきたということがあるんで。あれは、かなり分厚い何だったけども、薩琉関係史料で基本的に沖縄の制度史に相当する部分。『里積記』なんかもそうだよな。首里からそれぞれの地方までの距離とか、それぞれの地方の年貢高とかね、そういうものを集めた資料集なんだよ。僕はだから『里積記』を読まないといかんわけ、最初。

**石川** 先生、『里積記』というのは？

**西里** 里と積もる、積だね。

**石川** ああ。

**西里** 『里積記』と書く。それを東京にいた在

野の研究者の比嘉春潮<sup>⑤</sup>という人の、比嘉春潮先生が持つていたその史料を借り出してきて翻刻して、それを収録するという仕事をやつていたんだけどね。うん。そのあたりについてはね、僕は外間政彰さんの追悼記<sup>⑥</sup>に、かなり詳細に書いときましたけど(笑)。六〇年代の市史編集のエピソードを。

**今西** ああ、そうですね。『沖縄県史』のほうもやられるようになったんですね。

**西里** そうそう。あのころから『沖縄県史』にも関わつて。『沖縄県史』は近代を対象にしているから。

それに関わつた契機というの、いささか裏話があつて。恩師の島尻勝太郎先生が沖縄県史の編集委員をやつていたが、『沖縄県史』の政治編の総説を島尻先生が書くことになつていた。だけど、政治編の総説というのは、それこそ戦後になつて、いきなり近代史をどう総括するかという、非常にセンシティブな難しい問題をはらんでいるわけだよ。差別の問題等々。

島尻先生は「とても自分ではまともきれないから、君、一つ書いてみてくれんかね」と言われたの。こっちはこつちで、そんなに蓄積も何もないし、書けるはずないんだけど、行きがかり上やらざるを得なくなつちやつて。それで半年ぐらいで、何ちゅうのかな、まさにでつち上げたという感じのね、何を(笑)。



おはま・いくこ◎琉球大学法文学部卒。法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程単位取得退学。沖縄近代史、台湾近代史、日本近代史（主に、日本の植民地統治政策史）、加害の元凶は牡丹社蕃に非ず―「牡丹社事件」からみる沖縄と台湾』（京都大学文学部編『二十世紀研究』第七号、二〇〇六年）ほか多数。第二回窪徳忠琉中関係研究奨励賞（沖縄国際大学南島文化研究所、二〇〇八年）受賞。

ろの県史をやった人たちが、かなり中心になっていますね。  
**西里** そうですよ。あのころに若手で、かけずり回っていた人たちが牽引役を。  
**今西** ええ。七〇年代、八〇年代の牽引役ですよ。

**今西** でも、それがあれでしょう。琉球処分とか旧慣温存論とか。

**西里** そうそう、出発点になっちゃっているわけなのよね。だから、あれは島尻勝太郎の名前で出たんだけど、ほとんどゴーストライターだった僕の書いたもの。

**今西** そうなんですか。県史は島尻さんの名前だったんですか（笑）。

**西里** 僕も冷や汗ものではあったんだな。

**今西** そのころは、先生はまだ三十代ですか。

**西里** そう、三十過ぎたばかり。帰ってきて間もなくだから。だから、今から言ったら大冒険だな。

**今西** わずか半年で（笑）。

**石川** 『那覇市史』と並行してなさっていたんですか、県史は。

**西里** そうそう。だいたい人脈的に重なっているからね。

**今西** だけど、沖縄の歴史というのは、そのこ

やつぱり外間さんの力量なんだろうな。計画をどんどん膨らませたんだよ。史料が次々に出てくるから、これは那覇に関係するけれども、那覇だけじゃない。那覇は沖縄の首都で、全体をカバーせにやいかんという理由付けをして、議会とも渡り合って、それでどんどん拡大して、最終的には三三巻ぐらいになったかな。何次計画、何次計画で、五、六回計画を編み直しているんですよ。

**今西** よく出しましたよね、あれだけね。

**西里** 彼は、またキャラクターが非常に面白いというのか、人脈的に包容力があるから、右も左も全部含めて統括できる人間なんだよね。議会を説得するにも非常に説得力のあるやり方で。その一方で、市史編集室の人員体制を確立するというのが、非常に外間さんにとっても重要な問題。そのためには、きちんと常勤職を置かないといかんというんで、彼の時に嘱託三名が正職員になったわけです。そのうちの一人

が僕だったんだけど、僕は一年もたないうちに、また琉大（琉球大学）に行っちゃったけどね。ちよつとだから、外間さんにはすまんことをしちやっと思ったから、その後も、ずっと常勤的な仕事を、こつちも関わらざるを得なくなっていくわけですが、その過程で、もう僕の研究の軸は琉球史、沖縄史に向かわざるを得ないということになったんだよね。

#### （六）西里Ⅱ安良城論争

**今西** その沖縄近代史についての著書（西里喜行『沖縄近代史研究―旧慣温存期の諸問題』沖縄時事出版、一九八一年）を出されたのは何年ですか、それは。

**西里** これはね、安良城盛昭<sup>64</sup>さんの論争<sup>65</sup>が中心だから七〇年代に入ってからじゃなかったかな。

**大濱** 昭和五六年。

**石川** 八一年です。

**西里** 八一年、そうそう。七〇年代の仕事が、一応ここにまとまったということなので。

**今西** それを戻ってきた安良城さんがたいたわけですね。

**西里** そうそう。だけどね、安良城さんも琉球史の研究をやり始めたのは、そんなに古くないですよ、どつちかかっていうと、僕の方が早いほうで、お互いさまのようなところがある。僕

も本場の東洋史では経済史をやってきた経験があるから、何て言うのか、要するに、かみ合うところがあったわけさ(笑)。あの時はね。

**今西** 安良城さんが、こつちへ戻ってくるのは八〇年代ですよ。七〇年代の終わりか、八〇年代初期ぐらいでしょう。

**西里** 七〇年代から八〇年代にかけてだな。沖縄に入ったのは八〇年代に入ってからかな。沖縄大学に集中講義で来られた頃から、しょっちゅう激論を交わして。

**今西** でも、『沖縄県史』を読んで彼は批判的でした。

**西里** そうそう。『沖縄県史』はなつちよらんというような批判の仕方で、すごく全面否定してくるから、「いや、それはちよつと待ってくれ」と言つて。

**今西** それは攻撃的ですからね。

**西里** あれは相当、攻撃的にされたけど。安良城さんの家に招待されて、自家製の料理をご馳走になりながら、もう徹夜ですよ(笑)。徹夜で議論をしたんだけど。結局、田港朝昭さん、金城正篤さん、それに僕の三名で相手したんだけど、田港さんや金城さんはもう途中で(笑)。

**今西** そうですね、琉球処分の本は金城さんが出されたわけですからね(金城正篤『琉球処分論』沖縄タイムス社、一九七八年)。

**西里** それで最後まで付き合ったのはこつちのほうだから、一番ターゲットにはされたよね。

**今西** いや、もうそれはすごいですよ。相手を否定するときのね、安良城さんのあれは、鬼神のごとく。

**西里** ちよつと小さなミスを見つけたら、それを最大限にね、針小棒大に攻撃してくるから。

その攻撃の仕方を習熟しておらんと、ちよつと論争にはね、太刀打ちできないというあれがある。

**今西** 太刀打ちしようと思うと大変な人なんですよね。

**一同** ははは(笑)。

**今西** 反抗したら、もうすごい。

**大瀨** 徹底的に来る。

**今西** 倍、数倍の力で破壊しようとしてくるから。

**西里** ははは(笑)。

**今西** まあ当時、京都でも、幕末維新研究で堀江英一さんなんかやっていて、『幕末・維新の農業構造』つて堀江さんの本が出て(堀江編、一九六三年、岩波書店)、それが気に食わなくなったたら、もう岩波書店に乗り込んでいつて絶版にしろというので編集者をつるし上げるわけですから(笑)。それはもう、すさまじい。

**西里** ものすごいエネルギーがあったよね。

**今西** ええ。今はどう思われますか？ 旧慣論争、

安良城さんとの議論は。

**西里** いや、だから実証的には僕は全然揺るがないんだけど、方法論で若干考えなきやいかん問題はあると思う。実証的な諸論点について言

えば、こつちが出した具体的な史料等について、安良城さんは回答せず、誤解したまま最後まで押し通したんですよ。

**今西** 安良城さんは、だけど、方法論の問題でも、そういう沖縄を差別、被差別として捉えるのに非常に批判的な捉え方ですね……。

**西里** そうそう。だから、その方法論については、一面、安良城さんに正当性があるかなと思

うところもあるわけよね、今ではね。だけど一方では、この差別論そのものが意味がないと。全くナンセンスだと。差別史観というのは、もう取っ払わなきゃいかんというのが安良城さんの立場だったんだけど、だけど現実には、その構造的なものは依然としてあるじゃないかと。それをどう把握すればいいのかというよ

うな問題については、安良城さんも、そんなに正面からは答えていない。

**今西** 安良城さん、よく分かってなかったんじゃないかという気がするんですけどね。沖縄の差別というものをね。

**西里** だから、何て言うのか、差別史観への安良城さんの批判というのは、差別だけで見極めようとするとな面的になるぞというふうなこと

は確かに、僕もその通りだと今では思うんだけどね。だけど、差別の問題というのが解消された時点での議論ではないので、それが再生産される可能性も秘めておるといふか、現実をね、やっぱり見る必要があったんで。

で、そこらについては、僕はだから安良城さんへの追悼論文集が刊行された時、沖縄史における、何だっけな、民族の問題か。なんかそういうタイトルで、琉球意識の生成、形成、拡大、再生というような副題を付けちゃったんだけどね。<sup>⑧</sup>

そこで言ったことは、やっぱり、そういう差別的構造的なものが、歴史の長いプロセスで克服されつつある、あるいは克服される条件が形成されてきたという点は、一面、ちゃんと見ておかなきゃいかんのけども、しかし、それが諸条件の組み合わせによつては、再生産されるという可能性も依然として秘めておるといふのが、僕の批判の主眼であるわけだけどもね。

だけど、安良城さんから言わせれば、これは薩摩の琉球侵攻（一六〇九年）、侵略というのは、これは第一回目の、何と云うのか、琉球が日本に統合される階梯であつて、琉球処分は第二の階梯、ここで一応、この差別的構造は制度的には解消されたんだという、そういう過去形で捉えようとする議論だね。これは、高良倉吉君が提起した琉球史の枠組みといふのか、

構造といふのを、一面借用している面もあるとは思うんだけど。だけど、そういう問題の提起の仕方から言うたら、むしろ藤間生大<sup>⑩</sup>さんが先駆者なんだよな。

今西 ええ、そうですね。あの本、『近代東アジア世界の形成』（藤間生大著、春秋社、一九七七年）は、あまり評価されなかったですけどね。西里 そうそう。だけど、琉球差別の問題を考へるときには、大きな一つの契機といふのか、きつかけを与えてくれたといふふうに思うんですね。

ただ、その時の藤間生大さんの議論は、歴史的な条件の組み合わせといふのによつて、島津の侵攻以後、琉球はだんだん日本への距離を縮めたといふ捉え方。だから意識の面でも、近世期において、琉球意識というのがだんだん薄められていくと、そういう過程にあると。で、琉球処分の時点で、さらにこれが一種の消滅していく過程だと。琉球意識といふのは、だから、ナロードノスチ<sup>⑪</sup>といふのがナーツイヤ<sup>⑫</sup>になつていく途中の段階だと。

今西 民族体から民族へ。

西里 エスニシティ（ethnicity）からネーション（nation）になつていくといふようなね、そういうプロセスを頭に描いて捉えようとしたといふことがあるわけなんです。

僕は、当初は非常に魅力的な捉え方だと思つ

たんだけど、一九七二年の日本復帰、返還の前後の状況から見ると、消滅過程と言いながら、しかし、むしろ、それが再生される、そういう条件が生まれてきたんじゃないかといふふうな面も見逃せないといふことで、消滅過程ではなくて、これは再生復活過程といふことにもなり得るといふことを追悼論文のほうでは強調したかったわけなんだけどもね。それに対する安良城さんの反論は、もう聞けなくなつただけども。

ただ、安良城さんが危惧したように、今度はそういう差別構造的な、差別史観的な側面が前面に出ちゃうと、やっぱり見落とされてしまふものが非常に多くなつてくると。それだけでいくと、近代史、琉球処分から沖縄戦までの近代史といふのがすつ飛ばされてしまうといふ問題があるんですね。

だけど、その歴史といふのは、そういう連続と不連続の組み合わせかも知らないけど、連続の側面を全く切り捨てちゃうと、展望がどういふふうを描けるかといふ問題があるような気がするんです。そういう意味で、近代七〇年のこのプロセスといふのを、どこを引継ぎ、どこを克服すべきかといふ課題が、むしろ見えなくなつてくる可能性があるよ。

琉球王国のそのままの復活といふのはあり得ないことで、じゃあ、どういふふうにか、これを展開していくのかと、弁証できるのかといふ



西里氏（左）と大瀧（中央）、今西（右）

ことを考えなきゃいかんのだが、それが難しい時期に今あるんじゃないかというような気がしてはいるんだけどね。

**今西** だけど、一五、一六世紀の琉球王国の、この海洋国家としての琉球の発展、その琉球の独自性をつくった時代と、薩摩の侵攻以降の非常に悲惨な収奪の構造をつくり出された琉球と、それから琉球処分というので考えると、安良城さんたちの割と、もう一方で非常に近代化のプロセスというのがどうしても議論としてあつて。

**西里** そうそう。

**今西** それともう一つ、あのころの議論として、民族統一という課題というのが、かなり大きな問題としてありましたね。だから、それを上からとか下からとか、私はそういうのはあまり意味がないというふうに書いたんだけど、あのころの考え方としては、フランス革命のように下からの統一ができればと言ったけど、フランスだつて本当に下から統一したのかという話。

**西里** モデルをどこに求めるかだね。

**今西** という問題があつて、フランスなんかでも、それならアルザスはどうだったんだという、もちろん、そういう問題があるわけなんですけれども、それでも琉球王国というようなものを、もちろん再建したい、その琉球人アイデンティティーを求めていきたいという気持ちは非常によく分かるんですけどもね。

だけど、近代化というのは、やっぱり両面を持つていて、両プロセスがあつて。そういうふう近代化を迎えなければ社会が進んでいかない面と、しかしそれが全部解放につながるわけでもないですね。その中で生まれてくる差別の問題というのは、非常に深刻な問題として存在するわけですね。あのころは、あまりそれが捉えられなくて、やっぱり近代化の方向でみんな議論しなきゃいけないというふうな意見が強すぎたと私は思っていたん

ですけどね。

**西里** だから、そういう複眼的な視点というのを、それが必要なときに、それを持ってないようにしちゃったという問題点がある。

**今西** かなり単純な議論にした経過が私はあると思うんですけどね、そこがね。

ただ、その場合でも、旧慣温存とか、ああいう政策が遅れたということが、例えば松方デフレを直接受けなくて沖縄は済んだというような議論で済むのかどうかという議論があつて。その遅れというのは何だったんだという。植民地政策として、いずれはやるつもりでいたんだけど、その時の力量ではできなかったというふうな問題なのか、そこが難しいと思うんですけどね。

**西里** 難しい、なんだよね。だから安良城さんは、よく「法制的には差別なんかないんだ」と。

**今西** だけど、タイムラグはありますよね。すごく、現実にはね。

**西里** そうそう。タイムラグと同時に、またそれは質的な違いというのも考えなきゃいかんと。

**今西** ええ。そのタイムラグは時間の問題だけじゃなくて、社会構造に影響を与えますからね。あの時期の議論を、そういうふうにもまた裁断してしまうのも、ちょっと酷かもしれないですけどね、今のいろんな事態の中で。

**西里** だから、歴史的転換の時期には、また見

直されるのは当然なことだとは思いますが。

## 二 東アジアのなかの琉球

### (一) 琉球処分と台湾

**今西** それと、その琉球処分の具体的なことはちよつとあれですけども、例えば金城（正篤）さんなんかは、琉球処分の目的を、台湾出兵、台湾侵略と結び付けて割と捉えられましたよね。

**西里** うん。

**今西** あれは、そう考えていいんですかね。広い意味では琉球処分や沖繩を取ることは、南のほうへの進出という問題はもちろん結び付くと思うんですけども、琉球処分そのものは先行するわけで、台湾出兵は並行しながら、ちよつと遅れて出てくるわけですよ。

**西里** だから、どつちもどつち。相関的というか、相互利用的な側面があると思うんですけども。これは毛利（敏彦）さんなんかの実証というの、細かい何で。

**今西** 今年亡くなったんですよ、毛利さん。あまり大きく新聞に出なかったですけどね。

**西里** そうですか。毛利さんが提起した論点は、事実関係からいうと、確かに直接には連動しない。けども、大きな流れから言えば、それは

やっぱり連動せざるを得ない、そういう側面も強く持っていたと思うんですが。それは、琉球の内国化と僕は言っているんだけど、内国化のプロセス、内国化の課題というのがあるんですけども、大きな対琉球政策の基本に敷かれていると。そこから見れば、時期が早いか遅いかの問題はあれ、最終的には内国化の完了というのが処分だというふうにつまっていたと思うし、実際そういうふうな流れになったということはおかなぎやいかんと思うんですよ。

**今西** あと、さっき言われた分島の問題ですね。離島の分断、分島改約条約。あの時期のね。

**西里** 琉球分割というの、これは大きな流れから言えば、明治政府の条約改正と極めて密接に絡まっちゃって、条約改正の一つの手段でもあったんだよね、これはね。

日清条約を、日清修好条規か、それを日本側に有利なように変えさせるには何か餌を与えなきゃいかんというんで、宮古・八重山が差し出されるとい関係なんで、その本質には、やはり日本の対外政策全般に関わる条約改正の課題、その条約改正の課題の一つの手段として琉球分割というのがあって、それがまた同時に、近代の日本の国境画定の問題と絡められたということだと思うんですよ。

国境画定の課題も、それは当初からあるにはあったんだが、それだけじゃなくて、やっぱ

り条約改正の問題と絡まってきたというところに、この分島改約、琉球分割の大きな問題があるわけで、そこをきちんと捉えておくことが、いわゆる琉球処分をどう捉えるかということと非常に関わってくる問題としてあるというふうなふうに思っていますね。

条約改正は八三年で期限切れだから、その後、明治政府が取り合わなくなったということの意味もよく分かるんですけども、それまでは八三年、いや、八四年、八五年ぐらいまでは、相当執拗に明治政府のほうから、むしろ分割条約の締結を迫っているわけですね。

清国側からいっても、この分割条約に、当初は琉球の主権問題という大義名分を立てて対抗しながら、結局は、自らのメンツをどう保つかというので、二島だけでも切り離せばいいというふうになっちゃったんだが、それに対して、琉球側が主体的に断固反対だという請願を執拗に繰り返すということで、清国側も調印に踏み切れなかったという事情があるわけだから。それが決定的な要因となって、結局は、この分割条約が浮上するたぐいにつぶされていくと。清国側が調印できない状況をつくっていくというところになったという点では、僕はやっぱり、亡命琉球人の果たした役割というのをきちんと総括して、位置付けておかないといけないんじゃないかということを行っているわけで。



それで何が得られたか。それは分割されなかったというだけの事実は残ったけど、結局、琉球は併合されたんじゃないかという批判もあります。結果として併合されたんだけど、分割されずにそのまま残ったということの意味は、第二次大戦後の歴史の中でも、やはり生かされているというふうに見なきゃいかんというふうに思うんだよね。

**今西** それの反対の主体というのは、やっぱり亡命琉球人ですか。

**西里** そうそう。それを支える琉球側の一定の条件もあったということです。

**今西** それは何ですか。尚泰<sup>(28)</sup>なんですか。

**西里** だから旧王府の、いわゆる残存部隊だけではなくて、これはかなり目には見えないところだけでも、下層士族層から農民層まで含めて彼らを支援する体制ができていたという、そのところをどう評価するかという問題があると思うんだけど、一般には、それは上層士族のはかない願望にすぎないと安良城さんなどは切つて捨てるんだけど、それで問題は解決しないと思います。

要するに、廃琉置県から日清戦争までのかなり長期にわたって、日清戦争の後まで、この抵抗が続くというには、それなりの琉球側の支えというのがあって初めて可能だったわけで、それは、この見落としてはいけない要因ではない

かということ、僕はずっと主張してきたんだけど、なかなかそれは(笑)。

**今西** そこは、だから日本史が、あまりうまく組み込めていない、分島改約条約の動きなんかの。

**西里** そうそうそう。

**今西** 後の動きを、琉球側の主体というものをほとんど問題にしませんからね。

**西里** 問題にしないわけだね。それは中国史の側からいっても、中国の側も、一応、建前としては琉球に寄り添っている姿勢、ポーズは取るんだが、本音のところ、やはり早く解決したいというのもあるわけだね。近代的な外交関係に入っていく中では、こんな小さな琉球など切つて捨てて、日清提携、同盟を、むしろ結んだほうが得策だという議論は、清国の中でも相当広範囲に出ているわけ。

**今西** 清国も近代化している過程ですからね。

**西里** そうそう。そういう郭嵩燾<sup>(29)</sup>や黎庶昌<sup>(30)</sup>の見解というのも一定の清国内での支持基盤があるわけだから、そこらもきちんと捉えておかないといかんと。琉球分割条約をやつぱりつぶしたというか、条約調印に踏み込ませなかつた要因というのは、やつぱり琉球側の訴えであつて、それがなければ、李鴻章<sup>(31)</sup>だつて早く決着したいというふうに動いていたという時期が、一八八〇年代の前半には、まだずっと続いてい

るわけですね。

## (二) 中国と琉球

**今西** 先生、もうちよつと話を広げると朝貢体制ですよ。中国との関係での、特に最初に朝貢のことをいろいろ書かれていたわけですけど、最近の研究では、かなり理念化された朝貢というのとの実態の朝貢というのは随分違うんじゃないかという議論<sup>(32)</sup>があつて。

**西里** ああ、それはそうだよ。

**今西** 琉球なんかは、割と平和な朝貢というか、あまり武力的な戦いというのをね、その分島改約条約の問題はもちろん大きな問題としてあるわけですけど、しなくて。朝鮮やベトナムなんかでは軍事的な侵略まで含むような朝貢というのを経験しますが。

**西里** そうそう。

**今西** そういう意味では琉球の朝貢は、ある意味では非常に理念的な、理想的な朝貢に近い形態というわけですよ。

**西里** それは、だから当然だと思つよ。歴史の捉え方として、理念と現実というのは、相当、乖離してくるのは当然のこと、そういう点では、夫馬進さんなんか言っている薩摩の侵攻の時点で既に琉球は消滅したという捉え方も一つの捉え方ですけども、夫馬さんは、理念(同時代人の認識)から琉球は消滅したというよう

なことを導き出そうとするわけだよね。朝鮮知識人の琉球認識がどうたら、清国知識人の琉球認識がどうたらというふうなたちで、琉球はもう消滅したというふうに同時代の知識人は見えていたという事実を根拠として。

確かに、同時代人の認識の中では、その通りかも知れませんが、実体的にはどうなのか。琉球は主体性を相当の部分奪われながらも、ぎりぎりのところで主体性を固持するというか、それが冊封・進貢の関係ということで発揮されたということだと思っんです。

だから、そういう意味では、理念的に琉球が消滅したという認識のあり方というのは、これは一時的な薩摩侵攻から半世紀ぐらいの間、半世紀にもならんぐらいの間のこと、だけど、琉球を偽のエセ国家、あるいは薩摩が後ろで糸を引いている国家というふうな認識であつても、実態として中琉関係というのが継続されていく中で、琉球側は中国に対しても少しずつ主体性を拡大していくというね、そういうことをやっているわけですよ。

遭難民の護送問題等についても、これは幕府に対して既成事実を認めさせるということだけではなしに、清国側からも、何て言うのか、琉球に遭難した中国人を送り返す際の護送船の制度と、護送船を出すということを認めさせるという。それは琉球の貿易機会を拡大するとい

うことを意味するわけだから。

そういう点では、いろんな重要なところで、琉球は主体性をかなり奪われながらも回復していく、徐々に拡大していくという過程をたどったのが近世期の琉球だと思うんですよ。これは薩摩に対しても幕府に対してもそうだけれど。

**今西** そうすると、薩摩がいたから中国は琉球に対してあまり強い態度に出られなかったという、そういうわけではないわけですね。

**西里** そういう関係ではなくて、清国側では、薩摩の影というのはだんだん薄くなるわけですよ、歴史的な経緯の中でね。むしろ、これを思い出すことが大事だというような指摘も、のちに出てくるわけだけれども。だけど、実態としては琉球側の外交操作というのか、それによって中琉関係の実体化、薩琉関係の実体化というのが、琉球側にとって主体性を拡大できる方向へ動くんだということですよ。

それは巧みに、東アジアの国際条件を琉球側が操作したというか、巧みに利用したという風にも解釈されるわけだけれども、それを成し得た主体性というのは、ちゃんと了解しておく必要がある。だから、それとともに琉球の自己意識というのが拡大し、強化していくというの、それはまた当然のこと、琉球の歴史意識というのが相当定着するきっかけになったのは、『中山世鑑』、『中山世譜』、『球陽』、『歴代宝

案』等々の歴史書の編纂ですよ。『琉球国由来記』とか、そういう歴史意識が強化されていくというの、近世期の一つの特徴だろうね。

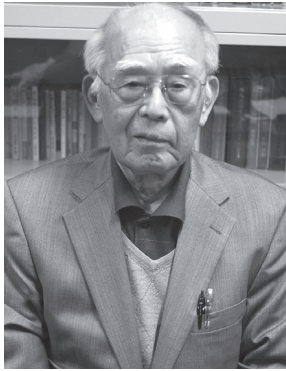
**今西** それはそうでしょうね。その歴史的なアイデンティティーがなければ、歴史書は生まれにくいと思いますけど。

**西里** うん。だから、そういうものが、ずっと拡大しながら維新期に来て、そこで新たな要因が入ってくると。欧米の圧力というのに直面したときに、琉球がどういうふうな反応をするかということになると、これはやっぱり琉球は主体的に、ある程度、主体的に欧米に対しても対応せざるを得ないということになる。

欧米との関係についても、薩摩、清国にかなり情報操作をするという主体性を発揮することになるわけですよ。その中で、ペリーやフランスのセシユとかね、あるいはオランダのほうからの琉球認識というの、これはやっぱり一つの国として認めた上での条約締結ということになるわけなんです。

**今西** でも、琉球はそういう開国は割とうまく逃げたということが言えるわけですね。

**西里** 逃げたというよりも、宗主国の清国やヤマトのほうはどう動いているかということも、かなり神経質にキヤッチしているわけですよ。今西 一応、尚泰は開国はのむわけですよ。西里 そうそう。



にしぎと・きこう◎一九四〇年生まれ。一九六九年、京都大学大学院文学研究科博士課程（東洋史学専攻）単位取得満期退学。二〇〇四年、京都大学博士（文学）。沖縄近代史、中琉関係史、『琉球救国嘆願書集成』（法政大学沖縄文化研究所、一九九二年）、『清末中琉日関係史の研究』（京都大学学術出版会、二〇〇四年）ほか編著書多数。第三三回伊波普猷賞（沖縄タイムス社、二〇〇五年）、第三五回東恩納寛惇賞（琉球新報社、二〇一七年）受賞。

今西 そこではね。

西里 のむんだが、その開国の条件として条約を結ぶんだけれども、その時に相当琉球側も要求を出しているということがあるんだね。

今西 そうしたら、あまりその尚泰なんかのね、影が見えないですよ。特に明治政府には、病気があって、ほとんど出ていられないし。

西里 尚泰は奥に床を取って、結局、王府が主体になるわけだけだね。

### (三) 朝貢システム

今西 だから先生は、最近の、だから簡単に琉球処分を琉球併合と言って朝鮮併合と結び付けたりする議論にはあまり賛成できないわけでしょう。

西里 うーん、いろんな議論があるんだが、僕が出した結論というのは、分割の問題が中心なんだけど、それはみんな、若手も中堅も老研究者もみんな、全く無視しちゃうんだよね（笑）。

不都合な事実として敬遠する、というのかな。

今西 東アジアの大きな変動の中で琉球処分を考えなきゃいけないっていうのは、それはそのとおりで、それは先生もやっておられたことでもあったわけですよ。

西里 それはみんなそう、やっているはずなんだけど。だけど、それをきちんと、論点が何だということ、どういう状況の中で、そういう論点が出てくるのかということ、きちんと押さえて、どうも言葉尻とかの、用語遊びみたいなものになっちゃったら、あまり意味がないじゃないかなと思うんだけど。若いうちは、そういうのをどんどんやったらいいんだ（笑）。こびずに何でもね。

今西 先生は、近世琉球というのは、どういう国家だというふうにお考えになっていたんですかね。簡単に言うと。

西里 国家と言ったら従属国家には違いない。

今西 中国の従属国家。

西里 いや、中国からも薩摩からも従属国家。

今西 二重の従属を受けた。

西里 まあ二重か三重か、それは（笑）。  
一同 ははは（笑）。

西里 欧米に対して、一種の従属的な立ち位置ですよ。

今西 琉米条約（一八五四年）以降ですか、欧米というのは。

西里 だから欧米でも、十九世紀に入ったら琉球を足場とするから。  
今西 だけど、そのそれぞれの朝貢のスタイルと違うんですよ。例えば琉球が中国に対して朝貢するスタイルと、朝鮮が朝貢するスタイルと、かなりやっぱ違いますよ。タイプそのものがね。

西里 うーん。違うと思うけど、僕はあまり比較したことはない。ただ朝鮮、韓国の場合は、かなり一応制圧されたという事情があるから。

石川 そうですね。一回武力で制圧されて敗戦条約を結んだから。  
西里 敗戦条約だ。  
今西 ベトナムもそうですね。朝鮮は元朝の時代に徹底的にやられますからね。  
西里 だから、それぞれの地域で冊封関係といつても相当の差があると思うんですよ。だから琉球の場合は、そういう冊封の理念が重要だ。理念というのが逆に、理念が相手との

交渉の際のカードになり得るということですよ。属国を勝手に宗主国が処分していいんですかというよなせまり方、宗主国の義務として属国を保護する義務があるでしょうというのが、やっぱり理念からしか説けないんだよね、それは。

今西 しかし、朝貢関係を薩摩は解消してしまわうわけでしょう。琉球処分の中でね。

西里 ああ、そうそう。薩摩との関係を切つて明治政府に取り込んでいくというよな。

今西 それもちよつと複雑な過程だと思うんですけどね。しかも、明治政府の版籍奉還とか薩置県とか、ああいうのに合わせてやっていくわけですけども、琉球はそれに従わなきゃいけないという理屈はあまりないわけですよ、ほんと言えばね。

西里 そうそう。しかし、明治政府だつて一応理屈に合わせるように見せかけただけなんじゃない(笑)。

今西 だけど、天皇の下での朝臣関係なんて、ほとんどないわけです、実態として一度も(笑)。大瀆 そうですね。

今西 近代になってつくり出したわけでしょう、結局。

西里 うん。そうそう。

今西 それも、だから朝臣だと言われても、臣民だと言われても困るところもあるでしょうね。

西里 歴史的な事実関係から言えば、朝廷との関係で、琉球に何らかの指令が来るというのはいわゆる事柄ではない。若干、「おや？」と思うような事例が出てくることはあるんだけど。

今西 でも、後でなんか無理やり付けているよなところあるんですよ。源為朝伝説とか。

西里 そうそう。後になって、それを針小棒大に拡大したというものはあるけれども。

今西 日琉同祖論もそうですよね。

西里 そうそう。

今西 近代になって作ったみたいな話ですよ。西里 いや、理念、概念はそうかも知らんけども、考え方としては向象賢(羽地朝秀)あたりから、既にもう、そういう志向はあるんだね。

今西 それを拡大させたわけですね。

西里 そうそう。全て物の名前も大和から来ているとかいう、あれも一つのこじつけだろうけども。全部が全部そうというわけじゃない。

今西 しかも、欧米と結んだ条約というのは全部廃棄させてしまうわけでしょう。琉球処分の後でね。

西里 廃棄させるんじゃないですよ。

今西 ああ、違うんですか。

西里 そこが問題。明治政府は、琉米条約等は自分が引き継ぐんだということで。だから廃棄とは言っていないですよ。この効力は明治政府が引き継ぐというかたちになっているわけだから。

廃棄というふうにしちゃったら、それはやっぱり国際的に。

今西 問題になります？

西里 問題になるわけで、そうしなかったというの、やっぱり明治政府の官僚もかなりのもんだというふうに思うんだけど。明治政府の官僚といつても、副島(種臣)とか、そこらは相当アメリカ、フランス等を利用しているんだよな。

今西 だけど、副島はあれでしょう、琉球政府が条約を結んでもいいと言っているわけでしょう。むしろ、それを改変させていくのは大久保(利通)あたりになって。

西里 だから、副島の冊封論というのは、これは何て言うのかな、いわゆる漸進策だと(笑)。あれは漸進策というのか、要するに大久保に比べて相当緩やかな何だという。

今西 そうですね。

西里 必ずしも即時編入を予定していたわけじゃないというの、誰だっけ、名前が出てこない。

今西 毛利さん。

西里 いやいや、毛利さんじゃなくて、小風秀雅さんだったかも。

今西 そうそう小風さん。

西里 そういう考え方も確かに一面だろうけども。ただ、冊封というやり方を考えたというの

は、相当、陰謀、深慮。陰謀・深慮だな(笑)。

**今西** でも、副島は失脚というか、政界から離れていきますからね。中心部からすぐね。

**西里** 政界離れるんだが、彼は個人の立場で、相当、李鴻章等に影響を与えたんだよ。

**今西** ああ、そうですね。

**西里** しょっちゅう李鴻章なんか会って、いわゆるアジア提携論、日中提携論を吹きまくっているわけよ。清国当局との交流の中で、日中提携の枠組みを維持するためには琉球問題を何とか解決したいというふうな腹づもりがあったと僕は見ているんだけど。

当の李鴻章も、副島の日中提携論にかなり共鳴、意気投合しながら、一面ではやっぱり自国中心的だから、清国の国益から見たらどうかという視点も入るんだけどね。一時期、一八八〇年代の前半あたりまでは、李鴻章もかなり、そういう意味では日中提携、日清提携の路線というものをベースに置いて外交を牛耳っているところがあるんですよ。

**今西** それと、だけど万国公法の原理でいうのとは食い違うわけでしょう？

**西里** だから、明治政府としてもそれを利用しながら、本音ではどうかは、また別の問題だから、表向きは日中提携して欧米と対抗するという戦略、それを掲げて、しょっちゅう琉球問題でも日中交渉、日清交渉を繰り返す。

**今西** なるほどね。

**西里** 交渉の冒頭で必ず持ち出すのは、いかに日清両国の関係が他の国々との関係よりも特別な友好関係にあるかということ、このことをひたすら強調して、清国側を引きつけていくという戦略、外交戦略を取っているわけだね。そういう点では、副島は相当、だから歴史も勉強をしているからだと思っただけでも、冊封というやり方を取ったというの、これは日本史上ではそんなに冊封の事例というのはいないでしょう。

**今西** ないですね。アイヌに対しては冊封ではないですからね。

**西里** うん。明らかにそれは中国を意識している。中国を意識して、しかもそれが琉球に受け入れやすい、後で抵抗の少ないかたちで受け入れられるということを見越して冊封ということかたちを取っておるんで。だからまあ、日本史上であるだけじゃなく、アジア史の中でも冊封というやり方は、明治政府のやり方は特異なやり方だけれども、それをせざるを得なかったという、当時の国際関係を副島はよく見ているということだと思っただよ。

**今西** それは面白い話ですね。その国内での琉球の冊封体制を利用しながら、東アジアの中で欧米との外圧をコントロールするという考え方というのはね。

**西里** うん、うまくそれをコントロールして、しかも当の清国に対して、日本が対等の立場を、まず確立するためには、お互いに冊封国を持つておると、冊封される国があるということが必要だというふうに判断したのかもしれないけど。

そこから出発はしているんだけど、だんだん清国に対しても日本が優位だというような立場に転換して。これはもう、脱亜入欧論の一つの帰結だろうとは思っただけだね。

**今西** 藤間さんも割とアジア連帯論を問題にしていたんですね、あの時期ね、東アジア世界のね。

**西里** 藤間生大？

**今西** はい。

**西里** そうそう。藤間さんはだから、そういう東アジアの秩序の中で、日本というものをどう位置付けるか。

**今西** そう。それと、かなり知識人がいたという、中国人も日本人もね。そういうことを支えるね。あの本なんかは、もつたいないですけどね。非常に評価が低くなってしまうって、東アジアのね。

**西里** だから、『近代東アジア世界の形成』だって、それはあまり正当に継承されてないという感じね。

**今西** 民族問題で切ることに対する反発というのは、最近強いですからね、特に。だから、なかなか藤間さんたちの理論は、うまく継承され

なきやいかんのですけども。

西里 まあ、それもあるかも知らん。

今西 百歳であれだけお元気だったら大したもんですよ。

#### (四) 沖縄の統合をめぐる

石川 ちよつといいですか。

今西 どうぞ。

石川 いろいろ主体性を沖縄、琉球王朝が発揮するようになっていたというお話とか、主権国家として条約を結んでいくということなんですけども、沖縄県というか琉球の中での統合についての意識というか、先ほどの先島とか奄美の話題とかもあると思うんですけども、そのあたりは、当時の人からするとどうなんでしょう。王朝の支配層の人たちと支配されている人と、また違うと思うんですけども、首里から見ると先島というのは、やっぱり自分の国の一部だという感じなのか、それともやっぱり、場合によっては切られても仕方がないということなのか、そのあたりは。

西里 近世期を通して、先島が琉球の中に統合されていくプロセスは、主として役人層と云うのかね、琉球王府から派遣される役人、これは宮古でも八重山でも在番、首里在番<sup>⑧</sup>というので、この在番と、あれに従う若干の、四、五名の役人たちがそれぞれ、八重山の石垣、宮古の平良

なりに行って常駐すると。それで土着の統治機構を管理監督するというシステムになっていくんで。その過程を通して、首里文化というのがだんだん持ち込まれることになるわけですよ。

その首里文化の持ち込みというのが、この役人、在番はだいたい三年に一回かな、三年任期で交代するんだけど、彼らが持ち込む首里文化というのが、だんだん地元の、特に石垣(四箇村<sup>⑨</sup>)と言っていた)のいわゆる土族層に浸透していく。そこから、さらに各離島に役人が派遣されますから、彼らもまた首里文化というのを伝達する役割を果たすということになって。

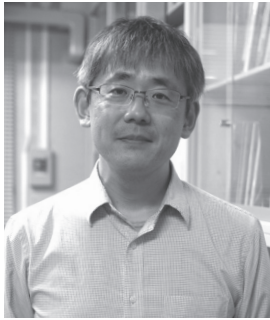
それから、在番が引き揚げるときには、現地の女性との間にできた子どもたちを首里に連れ帰るといことが認められていることもあるわけですよ。彼らはだから、そういう首里文化をもたらず、媒介する一つの重要な役割を担っているわけ。他方では、首里に行つて、一定期間、首里の文化を勉強して帰ってくるというふうな、交流が積み重ねられて。

という過程で、だんだん、われわれも琉球の一部だという意識を、特に土族層、役人層の中に広げていくということになるんだね。その広げていく一つの契機は、特に祭りなんかを通して、もともと島の伝統的な祭りの中に、そういう首里芸能を組み込んでいくということをやっているんですよ。

だから、私の郷里の竹富島の例で言えば、島津が入ってくる以前に、既に首里王府は八重山を制圧しているわけ。その時に、竹富島から連れていった西塘<sup>⑩</sup>という人物が、首里で長い間生活して、有名な石工になって、首里城の城壁とか園比屋武御嶽<sup>⑪</sup>の石門ね、それを築いたというふうな記録があつて、世界遺産にも指定されているんだけど。

それが功績を認められて八重山に送り返されて、八重山の出先のトップになるわけ。蔵元という統治機構のトップ。彼を通して、また相当、首里文化が入っていくと。僕は、種子取祭というのでも彼らの影響が強いんじゃないかというふうに思うんだけど、あまり賛成が得られない(笑)。

だから種子取祭の中で言う「うつぐみ」という言葉も、実際、沖縄の各地で「打組<sup>⑫</sup>」という言葉として、協力しなきやいかんというときの「うちぐみ」として使用されているのと同じなんです。それを八重山、竹富島にもたらしたのが、やっぱり西塘じゃないかというふうに僕は想定しているんだけど。事ほどさように、琉球からの文化的なきさまな影響というのは及んでいくと。これは、どこでもそうだけれども、官僚がその文化意識を広めて、共通のアイデンティティ<sup>⑬</sup>みたいなものをつくっていくという役割を果たすことになる。



いしかわ・りょうた◎大阪大学文学部卒、同大学院文学研究科東洋史専攻修了。主な研究分野は朝鮮近代史、東アジア経済史。著書に『近代アジア市場と朝鮮・開港・華商・帝国』（名古屋大学出版会、二〇一六年）があり、朝鮮半島を中心とした近代東アジアの国際商業・金融と華僑商人のネットワークについて検討した。

**石川** 中国の場合には、例えば科挙を通じて身分上昇できるというのがあると思うんですけど。  
**西里** そうそう。  
**石川** 琉球の役人、あるいは士族なんか、例えば、竹富出身だけど、優秀であれば首里に行つて勤めることもできるというような感じで、その身分の間の循環とか、そういうのもあったのかなと。

**西里** これがね、いろいろプロジェクトを組んで、みんな研究しているんだけど、身分の異動というかたちがあり得たかどうかというふうなことは、いろいろ問題にはなっているんだが。ただ、何らかのかたちで、いろいろ報奨制度があつて、この租税をきちんと納めたとか、あるいは親孝行したとか、いろんな事例で首里王府からの褒美というのかな、褒賞がなされると。それを通して、島の人たちが首里を意識してくと。

そういうことが各島にもあるわけですから

ども、そういう意識というものが、だんだん時間とともに拡大され、定着していくという過程にあつたことは確かなんです。それが、どの程度、基層にまで及んでいたかというのと、それはあまり高くは評価できない。意識としては、やはり沖繩は別世界という意識がずっと残るということもあるから。だから、先島でも意識の二重構造みたいなのは、ずっと続くんだが。

これはしかし、僕の小中学生のころもそうだったけれども、村芝居をやるでしょう。村芝居で必ず一つ二つ、ウチナーグチ（竹富島ではウチナーム二と言う）でやる芝居というのがあつて、あれは、それを見て、聞いて、言葉は全く分からんけど、仕事でいたい理想がつくから、それで、あ、こういう言葉は、こういう意味なんだろうなというふうなことを気付き始めるきっかけになる。これは僕自身の体験がそうなんだけれども、いわゆる外来文化との接触でカルチャーショックみたいなのがあつて、それでウチナー、

沖繩ということが意識

されるといふきつかけがね、世代を超えてずっと続くわけですね。そういうわけで、八重山の人も相当の数がウチナーグチ（ウチナーム

二）を理解できるようになる。役人はもちろん理解するんだよね。

そういう経緯があるから、琉球処分時点で亡命琉球人たちが、宮古・八重山を経由して清国に陳情に行く、亡命するという場合には、宮古士族、八重山士族は相当協力しているわけ。八重山からは独自に請願団を福州に派遣して、一日も早く琉球を回復してくれと福建当局に請願している。特に分島改約案が出た後には、そういう請願団が行つて陳情書を出している。陳情書が確認できるのは八重山だけでも、どうも宮古からも出しているようですね。

そういう面で見ると、琉球処分期の琉球意識というのは、それは大和に対して、あるいは清国に対して、かなりの程度の主体性として意識されていたと思います。大和と琉球は違うんだと、唐、つまり清国と琉球は違うんだという意識が根強くあつた。だから、自らを表現するときに、「唐や差し傘、大和や馬ぬ蹄、沖繩や針ぬ先」という位置付けで自己意識を形成している。

石川 針の先ですか。

**西里** そうそう。唐、つまり中国は、差し傘とというのは太陽や雨を防ぐ、いわゆる保護する傘だと。大和は、これはどういう意味がよく分からないが、馬の蹄だ。馬の蹄で踏みつけるということか、これは分らんけども、しかし、琉

琉球には琉球の立場があつて、針の先。針は生活になくなくてはならないもの、小さいけれども非常に重要な役割を果たすんだと。だから、面積の大きさを比較しているように見せかけながら、実際はそれぞれの特徴、立ち位置を示した言葉として今でも使われるわけだ。「唐や差し傘、大和や馬ぬ蹄、沖繩や針ぬ先」という意識というのは、かなり庶民にまで広がったと思われるわけだよね。

**石川** 琉球王朝の支配の範囲というのが非常に重要だったということですよ。

**西里** そうそう。役人がどこまで行っていたかということなんだと思うんだけど。

**石川** じゃあ、奄美なんかが一六〇九年以降は、もう、その外にあるつていうことなんでしょうか。

**西里** いや、必ずしもそうではなくて、唐から冊封使が来た時には、必ず道の島からも貢ぎ物を持つてくるわけです。で、その貢ぎ物を持参してくる道の島の知識人たちが那覇でナハンチュ（那覇人）とも、シマンチュ（沖繩人）とも交流する。また、清国から来た人物とも交流を重ねる。だから、行政的に切り離されてはいけるけれども、道の島でも何かにつけて琉球とながらうとする意識はあるということなんです。

例えば、災害のときなども、琉球が台風や長雨で危機に陥ったという時には道の島から救

援物資が送られて来る、あるいは、また逆に道の島が飢饉に陥った時には、琉球からの救援物資を送り出すというかたちで、相互依存関係と、相互依存意識というのかなりあるわけです。

日常の貿易等でも、山原（やんぼる、沖繩本島の北部一帯）からくり舟（丸木舟）を三艘、四艘連ねて、それに荷物を載つけて、辺土名から北のほう、与論島やその以北の人たち、徳之島等の人たちと日常的に物資の交換をやるという関係。それが合法的になされていたのか、あるいはひそかにやっていたのか、ちょっと分からないけれども、そういう事実がずっと歴史的に続くということはあるわけ。だから、行政的に切り離されたら、それで全く断裂したということでもないわけですよ。

そこをどういうふうな位置付け、理解するかというの、また一つの課題でもあるんだけど。ヤポネシア<sup>⑧</sup>というのは、まんざら実体がないわけではないと思います。

**石川** 戦後は奄美の、那覇とかに出稼ぎに来ていた人とかが結構いて、でも、やっぱり差別的な、そういうことも聞いたことが……

**西里** 奄美は、また二重に差別されるという関係だよ（笑）。

**今西** 奄美は、だけどあれでしょう。最初は奄美のほうが進進地域だったわけでしょう？ 鹿児島に近かったわけだから。だから逆に米作な

んかを九州から沖繩に持つてきて、それで琉球王朝が形成されてくる過程で、逆に奄美人たちの差別が強くなってくるわけ。だから下に見るといふね。稲作なんかほとんどにもやらない地域ということで見られるというふうなことの逆転現象が起こっているわけでしょう。琉球王朝の形成過程の中でね。地域性で言いますとね。

**西里** うん。

**今西** だから、非常に遅れた地域という意識を強く持つようになってきますよね。奄美にちょっと調査に行つたことがあるんですけどね。やつぱり文書を読んでも、琉球の役人が来ていても非常に遅れた地域という。そこで、豚便所とか、ああいうのに対して、ものすごい差別的に書いていますよね、文章の中でもね。だから奄美の人たちは、そこでまた非常に屈折した沖繩への意識を持つわけ。

#### (五) ロバート・バウン号事件

**今西** 時間もあれですけど、最後にちよつと一つだけ聞いておきたいんですけど、ここ（西里『清末中琉日関係史の研究』<sup>⑨</sup>）で書かれた第三章のロバート・バウン号事件の研究ですよ。

**西里** ええ。

**今西** 私は非常に興味を持って読んだんですけ



ど、特に奴隷貿易ですよ。

**西里** そうそう。

**今西** 黒人奴隷制ができなくなってくると、中国人奴隷というのがあって、最近、中国人奴隷の研究がアメリカでも進んできて。

**西里** 中国、インドね。

**今西** ええ。それで、大陸横断鉄道とか、ああいうのをやった、支えた労働力に日本史が、あまりこれに興味を持っていないんですよ。私はよく言うんです。例えばマリア・ルス号事件とかね。ああいうのって苦力が逃げ出した事件から発展しているわけでしょう。奴隷制の問題をどうするかと。何でマリア・ルス号事件を捉えるときに、中国人奴隷制の問題をね、ともに議論しないんだというの、むしろ不思議なんですけどね。

これもやっぱりあれですか、八重山の研究をやられた時の産物なんですか、この研究自体が。

**西里** うん。それはだから、ロバート・バウン号事件について、大和の研究者があまり関心を示さない、あるいは注目しないということも、確かに僕も何でかなというような気はしたんだが。あれはしかし、琉球と欧米の関係の中で生じた事件ということで、直接に日本とは関わっていないという意識があるんじゃないかなと。  
**今西** だけど、苦力貿易というのは大きな問題

ですよ。

**西里** そうなんだよ。だから、バウン号事件にしても、薩摩や幕府は全く知らなかったわけじゃないんだよね。何らかの指示を出していたはずなんだけど、直接にまだ、どういう指示が出たかということは、僕もまだ確認できていないから何とも言えないんだけど。

あの事件は確かに、琉球がかなり主体的に動いていると、対応しているというところはあるんです。その対応の仕方、琉球側では、遭難者の苦力に対しては哀れみを持って対応するという、それが原則なんで、できるだけ、その建前に沿った対応をしようとしたことも事実ではあるわけだね。

ただ、苦力の人数が多かったし、場合によっては暴動を起こす可能性もあるということで、相当神経も使っている。だから、できるだけ早く、琉球から立ち去らせたいと、送り返したいという意思もあって、方針はかなり琉球の中でもごたついているんですよ。方針転換は何回かやっている。

というの、琉球が欧米に対応する際の一つの大きな判断基準として、自国、琉球にとつての安全保障というのが最優先されるということがあるんですよ。だから、琉球にとつての安全が脅かされるということであれば、英米の武装兵が上陸してきて、あちこち搜索して逮捕

して連れ帰るというのも見て見ぬふりをする、見逃さざるを得ないという方針に転換することもあるんだが、原則としては、しかし、原野とか山奥に逃げた遭難者たちに対しては、食料を提供したり着物を与えたりと、さまざまな保護措置をとるわけですよ。これは建前上、そうしなきゃいかんということがあつた。彼らが清国に送り返されて、どういう待遇だったかというのを聞かれるはずだから、その時に、琉球は待遇がめっちゃよかったと言われたら、それは危ないとか言つて(笑)。

そういう点で、保護的なこの措置をとるんだけど、しかし他方、欧米が上陸して連れ帰るということに対しては、これは武装しているわけだから、対抗する手段もないし、また本音のところでは、早くみんな連れ帰ってほしいという何もあるから、見て見ぬふりをするということもあつたわけで、そこらあたりに、やっぱり琉球の主体的な判断というのがそれぞれ働いていることですね。

これは、だから自己決定権のレベルという点で言えば、それはそういうレベルでは確かに作用しておるといことなんです。ついでに言うと、この自己決定権というのは、今の主権という概念とは、ちよつと違うんだよね。どのレベルで自分で自分のことが決められるかという意味での自己決定権。それはかなり制約され

ているんだけれども、大きなこの枠の中ではどうしようもないということもあるんだが。

これは、例えば琉球が、明清交代の時代に清朝に付くか、残明勢力、南明勢力に付くか、これは琉球として非常に大きな選択であったわけですよ。どちからも自分への忠誠を要求してくるから、それへの対応というのは、薩摩の意見を聞いていたんでは間に合わないということもあるわけ。それはその都度、自分らで判断して決定していかなきゃいかんという経験をずつとやってきているし、その決定がうまく危機を、リスクを乗り切る上で重要だったという体験をしているわけ。

だから、その体験は、太平天国が内乱を起こして中国が大混乱したときにも、琉球からの使節は何回も派遣されるんだけど、福州止まりで北京に行けないというのが二回連続して続くんだよ。その時に、琉球はどういう対応を清国に対して取ったか。これは非常に興味深い何があつて、彼らは、かつての明清交代の経験をずつと引き継いで、あの時にこうだった、ああだった。だから今、冊封を要請したら、中国側からは実質拒否されて、福州で領封（琉球使節に冊封詔書を持ち帰らせるという方式）によつて冊封されるということになったら、これは困ると。だから、請封（冊封要請）の時期を見計らわなきゃいかんと、相当、神経を使つて

やっているんだよね。それで何とか危機を乗り越えたという経験がある。

だからその都度、どのレベルで琉球側に自己決定権があるかということを示す一つの事例ではあるけれども、そこをちゃんと見ておけば、琉球には主権などというのは全くないという見方はちよつとできないと。今でもやつぱり自己決定権つて、どのレベルで自分たちのことを決定できるかという、この見極めが大事なんだよね。

今西 だから、日本史はいつも琉球を忘れているみたいなのがあつて、日本近代史の中で、もうちよつと組み込んでいかなきゃいけない議論がいっぱいあるのに、そこを沖繩問題が抜けるんですよ、すぼつとね。

西里 だから、総括的に全体として見ちゃうと、ちよつと見落とすことが多いと。渡辺美季さんなんかの議論でも、いわゆる緩衝地帯で、いわゆる狭間の論理と（笑）。それは確かに狭間の論理ではあるんだが、交渉過程で具体的にどのように適用され、どのように機能するのかというのを、もう少し緻密に議論した上で、琉球の主体性、自己決定権の諸相を描いていくということが大事じゃないかと思うんだが。

今西 その中間的な地域というのは、あまり、やはりきちんと思えない癖があつて、すぐ明治政府と中国の関係、明治政府と欧米との関係の議

論で終わってしまう。

西里 そうそう。総体的に論じちゃうと、個々の具体的事実というのは見えにくくなつてくるんじゃないかということなんですよね。

今西 やつぱり琉球政府は中国の動きを一番気にしていたんですね。

西里 それはそうですよ。

今西 沖繩と英米に対してどう対抗するかというね。

西里 中国に対しても、条約締結の事実は巧みに情報操作して、直接ストレートには伝わらないようなやり方をしていているということがあるんですね。だまし合ひといえ、だまし合ひ。

今西 それは国際政治ですからね。

一同 ふふふ（笑）。

西里 だけど、それを明治政府は、自分らに黙つて、ひそかに清国に通じていたと、これは私通だという、本夫、つまり日本に対する裏切りで、姦通罪だというようですね。

今西 不義密通ですね。

西里 うん。不義密通という意味で、私通と言っているんだ。

石川 対馬のことは、私交というふうに。私に……

西里 ああ、そうそう。自分に都合のいい概念をつくつたんだよね（笑）。

今西 そろそろあれだね、時間も。

西里 なんと脈絡のない話で申し訳ないけど。今西 いや、ありがとうございます。

※お詫び・前号掲載「西里喜行氏に聞く(1)」の注81(四〇〇頁)は、文脈上不適切な位置につけられたもので、読者のみなさんの誤解を招くものとなっております。ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。ご迷惑をおかけした際は不要な注として飛ばしてお読みいただければ幸いです。(编者)

注

- (1) 那覇市の市制四〇周年を記念して一九六一年に企画され、六八年に刊行開始された。数次の企画変更を経て、二〇〇八年に全三三巻で完結した。
- (2) 一九六五年から七七年にかけて、琉球政府および沖縄県教育委員会によって刊行された。全二四巻。時代を近代だけに限定していることが特徴である。「那覇市史」とともに沖縄の歴史研究に大きな影響を与えた。
- (3) 沖縄歴史研究会が共同研究の成果として刊行したもので、西里を含め九人の論者が寄稿している(一九七〇年五月同会刊、七七年八月に増補改訂版)。沖縄歴史研究会は一九六五年一月に宮里栄輝を会長として発足し、同書を刊行するほか会誌『沖縄歴史研究』(一〇一―一〇二号)の発行や史料文献の復刻などを行った。
- (4) 『琉球諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定』(沖縄返還協定、一九七一年六月一七日調印)に基づき、七二年五月一五日、沖縄は日本に復帰した。なお、敗戦後同じく米軍の施政下におかれた奄美群島は五三年一月二五日、小笠原諸島は六八年六月二六日に日本復帰を果たしている。
- (5) 佐藤・ニクソン共同声明(一九六九年)が「核つき・基地自由使用」の沖縄返還を定めたのは、沖縄県民の意向を無視した一方的なもので、明治期の琉球処分、一九五二年のサンフランシスコ講和条約に次ぐ「第三の」琉球処分だとして、批判する立場から呼んだもの。
- (6) 平凡出版(のちマガジンハウス)の週刊誌、一九五九年〜八七年。
- (7) 集英社の週刊誌、一九五八年〜九一年。
- (8) 秋田書店の月刊誌、一九四九年〜八三年。
- (9) 学童社の月刊誌、一九四七年〜五五年。
- (10) 中村錦之助(なかむら・きんのすけ、一九三二〜一九九七)歌舞伎役者。萬屋錦之介の名で映画・テレビの時代劇俳優としても活躍した。
- (11) 東千代之介(あずま・ちよのすけ、一九二六〜二〇〇〇)日本舞踊家、時代劇俳優。
- (12) 一九五三年のNHKラジオドラマ、六〇年・七二年・七七〜七八年にテレビドラマ化された。
- (13) 福井英一と武内つなよしによる一九五四年の漫画で、一九五七年以後、映画・テレビアニメ・ラジオドラマ等として繰り返し制作された。
- (14) 石垣島北部、平久保半島の付け根にあたる字名。第二次大戦後、石垣島北部地区の開拓にともない交通上の要地となった。
- (15) 第二次大戦後の沖縄では、人口が急増したうえ既存の農耕地が米軍に接収されたことで食糧不足が社会問題化し、海外移民にむかえ県内の人口希薄地への移住・農地開発が進められた。石垣島・西表島ではあわせて一七か所の自由移民部落が形成されたほか、琉球政府の推進した移民計画(一九五二〜五七年)に基づいて、沖縄本島・宮古・奄美・地元の四八市町村から七二九戸・四一三八人が移住、あわせて二二の部落を形成した。
- (16) 石垣島の川平から東、平久保半島の付け根に至る一帯をいう。石垣市街地から見ると山の裏側にあたり、戦後多くの県内移民が入植した。蔑称として用いられることもある。
- (17) 『竹富町史(第二二巻)』によると、一九三八年時点で竹富島の人口一四七九人中、六五九人が出稼ぎに出ており、そのうち八割が台湾への出稼ぎだった。
- (18) 一九六三年八月一七日午後〇時五分ごろ、那覇市泊港の沖合で貨客船みどり丸(三〇二トン)が沈没し、乗客二二八人のうち一一二人が死亡・行方不明となった事件。みどり丸はもと琉球海運の先島航路船だったものを、砂辺海運が買い取って泊・久米島間の定期航路に就航させていた。
- (19) 一九四七年四月、沖縄県立八重山中学校・同高等女学校を母体に、連合教育区立として設立された。のち琉球政府立を経て沖縄県立となった。
- (20) 旧制沖縄県立第二中学校を前身とする県下有数の名門校。一九四七年一〇月、首里高等学校分校として開校、四八年二月に那覇高等学校として独立し、旧県立第二中学校跡地に校舎をかまえる。七二年五月の復帰にともない、琉球政府立から県立となる。
- (21) ラジオ放送は、沖縄では他府県より大幅に遅れ、一九四二年ようやく沖縄放送局が開局されたものの、四五年三月の米軍空襲によって壊滅し閉鎖された。戦後は一九五〇年二月、住民に対する広報宣伝用として、米軍管理のもとに「琉球の声」(AKKAR)が開設されたこと、ラジオ放送が再開された。
- (22) 一九四五年五月九日、撃墜されて竹富島沖合で漂流し

ていた英戦闘機パイロット(カメロン中尉、の名で呼ばれた)を捕虜とした。石垣島に連行されたが、その後の消息は不明である。

(23) 那覇市の繁華街の一つ。戦前は湿地が広がる郊外の県道に過ぎなかったが、一九五三〜五四四年に改修されてから発展し、『奇跡のマイル』と呼ばれた。名称は当時ここにあった「国際劇場」に由来する。

(24) 琉球列島米国高等弁務官府が沖縄住民へのPR用に発行した月刊誌。一九五九年一月創刊。沖縄の専門家をスタッフとして、沖縄の文化、米国の歴史などを紹介、約一〇万部が配布された。日本復帰後『交流』と改題され、七三年六月まで発行された。

(25) 国費学生制度は、一九五三年四月、日本政府の援助により、公費琉球学生制度としてスタートし、後に国費沖縄学生制度と改称される。日本政府が学費を援助し、県内の選抜試験に合格すれば本土の国立大学に枠外定員として入学が許可された。当初の募集定員は五〇人だったが漸次増員され、六七年以降は一七〇人。医・歯学部入学者が全体の四割を占めたことが特徴的である。琉球大学医学部設置(一九七九年)にもない一九八〇年度限りで廃止された。一方、自費学生制度は一九五五年に開始され、学費援助がないだけで、選考・入学の方式は国費制度と同様である。同制度は一九七二年度で廃止。

(26) 島尻勝太郎(しまじり・かつたるう、一九二二〜一九八八) 沖縄県宮古島生まれ。小学校・中学校教員を経て那覇高校教員(一九五〇〜六一一年)。以後も高校教員・沖縄大学教員を歴任する一方、沖縄歴史研究会の運営や『那覇市史』『沖縄県史』編集等を通じて沖縄史研究をリードした。とくに近世史の研究や史料整理に注力し、『球陽』の訳注により第二回伊波普猷賞(一九七五年)、著書『近世沖縄の社会と宗教』により第二回東恩納寛博賞(一九八四年)を受賞した。

(27) 内藤湖南(ないとう・こなん、一八六六〜一九三四) 秋田県生まれ。湖南は号で本名虎次郎。新聞記者を経て一九〇七年に京都帝国大学東洋史学講座の教員となり二六年まで在職。東京帝大の白鳥庫吉と並び日本の東洋史学章創期を代表する研究者とされる。

(28) 都出比呂志(ついで・ひろし、一九三七〜) 大阪府生まれ。大阪大学名誉教授。考古学。著書に、『前方後円墳と社会』(瑞書房、二〇〇五年) など。

(29) 広川植秀(ひろかわ・ただひで、一九四一〜) 大阪市立大学名誉教授。日本近現代史。著書に、『恒藤恭の思想史的研究』(大月書店、二〇〇四年) など。

(30) 安丸良夫(やすまる・よしお、一九三四〜二〇一六) 富山県生まれ。一橋大学名誉教授。日本近代史、宗教思想史。著書に、『日本の近代化と民衆思想』青木書店、一九七四年、後に平凡社ライブラリー) など。

(31) 村田修三(むらた・しゅうぞう、一九三八〜) 兵庫県生まれ。日本近世史。大阪大学名誉教授。日本近世史。著書に、『龍王山城跡調査概要』(天理市教育委員会、一九八二年) など。

(32) 狭間直樹(はざま・なおき、一九四二〜) 兵庫県生まれ。京都大学名誉教授。中国近現代史。著書に、『梁啓超 東アジア文明史の転換』(岩波現代全書、二〇一六年) など。

(33) 鳥越俊太郎(とりごえ・しゅんたろう、一九四〇〜) 福岡県生まれ。ジャーナリスト。京都大学文学部卒業。

(34) 宮城公子(みやぎ・きみこ、一九三七〜) 京都府生まれ。甲南大学名誉教授。日本近世史。著書に、『大塩平八郎』(朝日新聞社、一九七七年) など。

(35) 田端泰子(たばた・やすこ、一九四一〜) 兵庫県生まれ。日本中世史を専攻。京都橋大学名誉教授。日本中世史。著書に、『中世村落の構造と領主制』(法政大学出版局、一九八六年) など。

(36) 津崎幸博(つざき・ゆきひろ、一九四〇〜) 漢字研究者。元立命館大学東洋文字文化研究所客員研究員。漢字研究者。著書に、『人名字解』(白川静と共著、平凡社、二〇〇六年) など。

(37) 白川静(しらかわ・しずか、一九一〇〜二〇〇六) 福井県生まれ。立命館大学名誉教授。東洋史、とくに古代漢字研究で知られ、代表的業績として『新訂字統』『新訂字訓』『字通』の漢字字書三部作がある。

(38) 渥美文夫(あつみ・ふみお、一九四〇〜) 大阪府生まれ。朝鮮問題研究者、元予備校講師。著書に、『金日成・金正日体制と東アジア』(現代企画室、二〇〇七年) など。

(39) 北小路敏(きたこうじ・さとし、一九三六〜二〇一〇) 京都府生まれ。社会運動家。京大入学後、ブントに加入し、京都大学細胞長。全学連書記長として、六〇年六月一日、安保闘争における国会突入を指揮したと

て逮捕。ブント解体後、革共同中核派を結成し、最高幹部。

(40) 日本の新左翼党派の一つ。正称は共産主義者同盟。略称のフント(Bund「同盟」)は、ドイツ語名 Kommunistischer Bundに由来する。日本共産党を除名された学生党员らが一九五八年に結成。学生組織は社会主義学生同盟(社学同)。全日本学生自治会総連合(全学連)の主導権を握り、六〇年の安保闘争を主導したが、闘争後に分裂、解体。革命的共産主義者同盟(革共同) 全国委員会、日本赤軍の母体となった赤軍派、浅間山荘事件を起こした連合赤軍などが派生的に誕生した。

(41) 安保条約廃棄の全国統一行動。六〇年の五月一九日岸信介内閣によって新安保条約が強行採決されると、抗議運動は全国的に広がり、内閣退陣を要求するようになった。

(42) 一九六五年の日韓基本条約に反対する運動。佐藤栄作内閣は、韓国を朝鮮半島における唯一合法的な政府と認め、総額八億ドルの賠償金を引き替えに、韓国の請求権を放棄させた。

(43) 一九六〇年の安保闘争のなかでは、沖縄問題はほとんど課題にならなかった。しかし、米軍の基地は沖縄に集中するようになり、核兵器やサリンなどの化学兵器なども沖縄に集中して持ち込まれるようになった。

(44) 祖国復帰運動の中心母体で、一九六〇年四月二八日に結成大会。米軍の沖縄支配を合法化したサンフランシスコ講和条約が発効した四月二八日を「屈辱の日」とし、この日を中心に復帰運動をおこなうようになった。沖縄教職員会・沖縄県青年団協議会(沖青協)・沖縄官公庁労働組合協議会(官公労)が世話役団体となって結成され、沖縄自民党は参加しなかったが、革新三政党(沖縄社会大衆党・沖縄人民党・沖縄社会党)、PTA連合会、遺族連合会などを含む幅広い組織を構成した。

(45) 一九六三年以降毎年四月二八日に、米軍施政下の沖縄本島と、すでに返還されていた奄美群島の与論島のあいだ、当時日本の「国境」であった北緯一七度線の海上で、本土側代表団と沖縄側代表団でおこなわれた交歓集会。

(46) 日本共産党の下部組織の青年団体。一九二三年に結成

- された日本共産青年同盟が、戦後、日本青年共産同盟と改組され、日本民主青年団、日本民主青年同盟と改組される。同盟員数は七〇年代初頭に二〇万人と言われているが、二〇〇〇年代初頭に公称二万人とされて以来、現在ではその数は明らかにされていない。
- (47) 前身は社会党青年部。一九六〇年に安保と三池闘争のなかで生まれるが、六九年に向坂逸郎派、反戦派(解放派、第四インターなど)、太田薫派の「三つの見解」に分かれる。反戦青年委員会として活動するが、七〇年代には分裂をくり返し、現在は活動休止状態である。
- (48) 石川ジェット機墜落事件と呼ばれる。一九五九年六月三〇日、米軍ジェット機が授業中の石川市宮森小学校に墜落・炎上、死者一七人・負傷者二〇人を出した。この事件は後の反基地運動の萌芽となったほか、一九六〇年の復帰協結成のきっかけともなった。
- (49) 米国製の高高度地对空ミサイルで、一九五九年三月、沖繩本島の八か所に配備された。この基地建設にあたり米軍当局は強制的に土地を接収し、政治・社会問題化した。七二年の沖繩返還後は航空自衛隊が引き継いだ。
- (50) 在沖米軍は一九五三年から六九年にかけて核ミサイルを装備した(前注のナイキ・ハークューリーズもその一つ)。これらは沖繩返還を約した六九年の佐藤・ニクソン共同声明に則り、七二年の返還までに撤去されたとされる。ただしこの声明の裏で、有事の際は沖繩への核持ち込みを認める秘密協定の作成されたことが後に明らかになった。
- (51) 瀬長亀次郎の著書。一九五九年、三一書房刊。一九七一年と二〇一三年に新日本出版社から再版。
- (52) 高度成長期の都市部では社会問題化が顕在化し、市民運動が高揚した。これにもなって革新政党的公認や推薦、支持などを受けて当選した首長をもつ、いわゆる革新自治体が急増した。一九七一年の統一地方選の時点では東京都・大阪府をはじめ全国で約一六〇の自治体がこれに該当したとされる。
- (53) 蛭川虎三(にながわ・とらぞう)、一八九七〜一九八二) 東京都生まれ。経済学者、政治家。京都帝国大学教授、中小企業庁長官を経て、一九五〇年から七八年まで七期にわたり京都府知事を務めた。
- (54) 黒田一(くろだ・りょういち、一九一一〜二〇〇三) 大阪府生まれ。法学者、政治家。大阪市立大学教授を経て、一九七一年から七九年まで二期にわたり大阪府知事を務めた。
- (55) 美濃部亮吉(みのべ・りょうきち、一九〇四〜一九八四) 東京府生まれ。経済学者、政治家。東京教育大学(現・筑波大学)教授などを経て、一九六七年から七九年まで三期にわたり東京都知事を務めた。
- (56) 長洲一二(ながす・かずじ、一九一九〜一九九九) 東京府生まれ。経済学者、政治家。横浜国立大学教授を経て、一九七五年から九五年まで五期にわたり神奈川県知事を務めた。
- (57) 飛鳥田一雄(あすかた・いちお、一九一五〜一九九〇) 神奈川県生まれ。法律家、政治家。弁護士から政治家に転身し、一九六三年から七八年にかけて四期にわたり横浜市長を務めた。
- (58) 教公二法とは「地方教育区公務員法」「教育公務員特例法」をいい、地方教職員の身分保障を目的として、一九六三年から七九年にかけて琉球政府立法院で法案審議された。その中に教職員の政治活動や争議を制限する案項が含まれていたことから、教職員だけでなく市民の強い反発を呼んだ。六七年二月、デモ隊が立法院を包囲するなかで法案の採決は見送られ、廃案となった。
- (59) 一九五二年に発足した琉球政府の行政主席は米軍による任命制であったが、当初から主席公選を求める住民の声が高かった。米国民政府は立法院での指名制について間接選挙制を導入することで宥和をはかったが、直接選挙の要求を鎮めることはできず、六八年二月ついに公選制を認めた。同年一月に選挙が実施され、革新統一候補の屋良朝苗が当選した。
- (60) 外間政彰(ほかま・せいししょう、一九二四〜一九九六) 沖縄県那覇市生まれ。第二次大戦後、うるま新報社員を経て上智大学・早稲田大学で新聞学等を学ぶ。五七年那覇市役所に入り、「那覇市史」編纂事業を主導した。七九〜八四年那覇市立図書館長。伊波普猷生誕百年記念事業、沖繩戦記録フィルムプロジェクト運動などの文化運動にも積極的に関与した。一九九六年死去。追悼集に「爽風一過」(外間政彰追悼文集刊行委員会編・刊、一九九七年)があり、西里も「那覇市史編纂事業の拡大と外間政彰さん」を寄稿している。
- (61) 『薩琉関係文書』、那覇市史資料篇第一巻二として一九七〇年に刊行された。本文後出の里横記(御当国御高並諸上納里横記)のほか、琉球薩摩往復文書案、琉球渡海日々記、喜安日記、琉球館文書、船改之覚、三司官伊江朝睦日々記、琉球一件帳、薩琉関係史を収録する。
- (62) 比嘉春潮(ひが・しゅんちよう、一八八三〜一九七七) 沖縄県中頭郡生まれ。沖縄史研究者。小学校教員・沖縄県庁職員などを経て上京、編集者として勤務する一方、柳田国男に師事して沖繩の民俗研究に従事した。戦後は本土在住の沖繩出身者を組織した沖繩人連盟・沖繩文化協会の設立に参加し、沖繩の歴史研究や文献収集に尽力した。著書に、『比嘉春潮全集』(全五巻、沖繩タイムス社、一九七二〜七三年)など。
- (63) 西里喜行「那覇市史編纂事業の拡大と外間政彰さん」(『爽風一過』所収、前掲注60参照)。
- (64) 安良城盛昭(あらかき・もりあき、一九二七〜一九九三) 東京都生まれ。歴史学者。両親は沖縄県出身。第一高等学校、東京大学経済学部卒業。雑誌『歴史研究』に掲載された太閤検地に関する卒業論文で、『安良城旋風』を学界に巻き起こし、その時代区分論は『安良城理論』と呼ばれた。東京大学社会科学部教授を七二年に退職し、沖繩大学教授に就任、後に学長。八〇年より大阪府立大学教授(後、同名誉教授)。著書に、『幕藩体制社会の成立と構造』(御茶の水書房、一九五九年)など。
- (65) 旧慣温存期の歴史評価をめぐる安良城盛昭と西里喜行の論争。旧慣温存期とは、一八七九年の廃藩置県後、一八九九〜一九〇三年の土地整理に至る時期の明治政府の対沖繩政策を特徴づける用語。論争は、一九七七年八月から七八年一〇月にかけて『沖繩タイムス』紙上で前後四回にわたって展開された。「旧慣温存期」を沖繩における植民地的搾取としてとらえる西里と、松方デフレの被害を回避できたとする安良城との間の論争は、日本本土の沖繩支配の性格にまで及んだ。論争は決着をみないまま、新聞社の都合で論争は打ち切られた。論争の全容については以下を参照。安良城盛昭「新・沖繩史論」(沖繩タイムス社、一九八〇年)、西里喜行「沖繩近代史研究」(沖繩時事出版、一九八一年)。
- (66) 田港朝昭(たみなと・ともあき、一九三一〜) 沖縄県生まれ。琉球大学名誉教授。沖繩史。著書に、『沖繩県の歴史(県史シリーズ四七)』(新里恵二・金城正篤と

共著、山川出版社、一九七二年）など。

(67) 堀江英一(ほりえ・えいち、一九一三〜一九八二) 徳島県生まれ。京都大学名誉教授。経済史学者。著書に、『明治維新の社会構造』(有斐閣、一九五四年)など。

(68) 西里喜行「琉球Ⅱ沖繩史における「民族」の問題——琉球意識の形成・拡大・持続について」(高良倉吉・豊見山和行・真米平房昭編『新しい琉球史像——安良城盛昭先生追悼論集』榕樹社、一九九六年)。

(69) 高良倉吉(たから・くらよし、一九四七〜) 沖縄県島尻郡伊是名村生まれ。琉球大学名誉教授。沖繩史。著書に、『琉球王国』(岩波新書、一九九三年)など。

(70) 藤間生大(とうま・せいだい、一九二二〜二〇一八年) 広島県生まれ。日本史・東アジア史の研究者。熊本商科大学(現・熊本学園大学)元教授。著書『近代東アジア世界の形成』第三章で藤間は、沖繩には一五・一六世紀までに日本本土から自立した「琉球民族体」が成立したが、薩摩藩の侵攻と明治政府による琉球処分という二段階を経て「日本民族」へと転化していったと主張している。

(71) 日本語ではともに「民族」と訳しうるロシア語。スターリンが、一九五〇年六月に「プラウダ」紙に発表した論文「言語学におけるマルクス主義について」(日本語訳は『前衛』一九五〇年八月号)のなかで、前資本主義時代の「民族」をナロードノスチ、資本主義時代に形成された民族をナーツィヤと呼び、日本でも一九五〇年代に流行した議論である。

(72) 今西一「沖繩の「旧慣」温存論争」(『国民国家とマインリテイ』日本経済評論社、二〇〇〇年所収、一八五〜一八六頁)。

(73) 一八七一年台湾に漂着した宮古島民五四名が先住民に殺害されるという事件が起きた。日本政府はその報復を名目として一八七四年五月から二月にかけて台湾に出兵した。これを受けて清朝は日本側に見舞金を支払い、あわせて日本の出兵を「保民の義挙」と表現したため、琉球が日本に帰属することを間接的に認める形となった。金城正篤は著書『琉球処分論』(琉球タイムス社、一九七八年)のなかで、この事件が日本政府の沖繩に対する「近代的領土主権」確立を急がせたことを強調している(本論「台湾事件(一八七二〜七四年)」について

の一考察——琉球処分の起点として)。

(74) 毛利敏彦(もうり・としひこ、一九三二〜二〇一六) 千葉県生まれ。日本近代史の研究者。大阪市立大学名誉教授。日本近代史。台湾出兵に関する著作として、『台湾出兵——大日本帝国の開闢劇』(中公新書、一九九六年)がある。

(75) 日本政府による「琉球処分」後も清朝はそれに納得せず、琉球でも清朝に善処を求める動きが止まらなかった。一八七九年、李鴻章の依頼により米國大統領グラントが日本政府に調停を申し出るに及び、日本側は日清修好条規(一八七一年)を日本側に有利に改正すること(清国における内地通商権の容認など)と引き換えに、八重山・宮古を清に割譲することで解決を図ろうとした。清朝もいったんこれを受け入れたが、在清琉球人の強力な反対請願によって調停の直前に態度を翻したため、実現に至らなかった。

(76) 日清修好条規は、発効から一〇年目以降は改訂可能となっていて、日本はその期限である一八八三年以前に、清国の弱みを利用してつつ増約(加約)の形でその実質的な「改訂」を行おうとしたが、清国の遷延策にあつて、断念した。その結果日本は、修好条規の改訂期限を待ちつつ、「琉球処分」を既成事実化する途を選んだのである。(波平恒男『近代東アジア史のなかの琉球併合』岩波書店、二〇一四年、三三三ページ参照)。

(77) 琉球処分に反対し、琉球王国の維持・存続をかかげて清国に脱出、琉球の救援を清国政府に請願した琉球人のこと。脱清人ともいう。こうした動きは日本政府の琉球への圧力が高まる一八七六年ごろに始まり、琉球処分後に本格化した。一八八五年頃には福州に三〇数名の琉球人が滞在していたほか、北京、天津にも複数名が滞在して清朝への働きかけを行っていたとされる。西里は、こうした亡命琉球人の活動が清朝の外交担当者である李鴻章に分島条約への調停を中止させる契機になったとする。西里喜行『清末中琉日関係史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇五年、三九二頁。

(78) 尚泰(しょう・たい、一八四三〜一九〇二) 第二尚氏王統第一九代の国王であり、琉球処分時の国王であった。一八七九年の琉球処分に伴い首里城の退去を命じられ東京に移住した。

(79) 「亡命琉球人」の救国運動について、安良城盛昭は

「士族特権を永遠に維持したい、というアナクロニズム的な有禄士族の利己主義的意識」の反映とし、これを高く評価する西里の議論を「没階級の視点」が生んだ幻想だと批判している。安良城「琉球・沖繩と天皇・《天皇制》」同『天皇・天皇制・百姓・沖繩』吉川弘文館、一九八九年(論文初出一九八七年)、二〇八〜二二頁。

(80) 郭嵩燾(かく・すうどう、一八一八〜九一年) 清末の官僚。初代駐英公使などを歴任。西里によれば、琉球処分の前後、郭は琉球の朝貢を免除し、自立国としての地位を国際的に保障することを構想した。郭についての西里の論考は、「郭嵩燾の琉球自立論とその周辺」(『清末中琉日関係史の研究』所収、論文初出は二〇〇一・二〇〇二年)。

(81) 黎庶昌(れい・しよしよう、一八三七〜九七) 清末の官僚。駐日公使などを歴任。西里によれば、黎庶昌は琉球・朝鮮をめぐる日本との交渉に携わる中で日清提携論に傾斜し、一八九一年には琉球放棄を前提とした日清同盟条約の締結を提起した。黎についての西里の論考は、「黎庶昌の対日外交論策とその周辺」(『清末中琉日関係史の研究』所収、論文初出は一九九四年)。

(82) 一九九〇年代に濱下武志の「朝貢システム」論が大きな影響力を持ったが、中国史の岩井茂樹によって、一六八四年に清朝が海禁を解除して、各地に海關を設けてからは、朝貢体制は「互市体制」に転換したという議論も出されている。岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所、二〇〇四年を参照。

(83) 夫馬進(ふま・すすむ、一九四八〜) 愛知県生まれ。京都大学名誉教授。中国史。夫馬は近著『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』(名古屋大学出版会、二〇一五年)のなかで、一七世紀初頭の東アジア四か国(日本・朝鮮・琉球・中国)関係をとり上げ、一六〇九年の薩摩の琉球侵攻以後、朝鮮や中国の官僚たちが、琉球を日本によって「併合」されたものと認識していたことを指摘する(第三・四章)。夫馬によれば、朝鮮の側が、それと知りながら琉球を朝貢国として扱っていたのは日本のさらなる膨張を恐れたからであった。一七世紀以後の中国をめぐる国際関係は、こうした際どい緊張関係の上にかろうじて均衡を保っていたのであり、それを安定した「体制」のごとく捉えることは無理である、というのが夫馬の主張である。

- (84) 羽地朝秀(尚家賢)著。一六五〇年成立。琉球最初の正史とされる。
- (85) 『中山世鑑』を蔡鐸、蔡温が漢訳補訂したもので、一七二四年に一応の編集が完了したとされる。
- (86) 琉球の正史の一つ。一七四三〜四五年に編集が始まり、最終的には尚泰二九(一八七六)年の条まで書き進められた。
- (87) 一四二四年から一八六七年に至る琉球の外交文書集で、一七世紀末から複数回にわたって編纂された。
- (88) 琉球国の地誌。首里王府の編纂により一七二三年に成立した。
- (89) ペリー(Mathew Calbraith Perry)。一七九四〜一八五八)米國海軍軍人。一八五二年、日本開国交渉のための特命全權大使に任命されたペリーは、日本遠征の前夜五回にわたり那覇に寄港滞在した。日米和親条約締結(一八五四年三月)の直後には王府との間で琉米修好条約を締結した(同七月)。
- (90) センヌ(セシル)も、Jean-Baptiste Coelle、一七七八〜一八七三)フランスの東洋艦隊司令長官。一八四六年、セヌは千余名を率いて運天港に上陸し通商・布教を要求した。薩摩藩の急報を受けた幕府は、やむなき場合には貿易を許可するとの内諾を与えた。その後フランスは、琉米条約締結後の一八五五年、那覇で王府と琉米修好条約を締結した。
- (91) 琉球王府は一八五九年、オランダ使節ファン・カペレンとの間で琉蘭修好条約を締結した。内容は五四年の琉米、五五年の琉仏条約とおおむね同様であった。
- (92) 波平恒男(琉球大学教授)が著書『近代東アジアのなかの琉球併合』(注76参照)のなかで、「琉球処分」を朝鮮併合の先駆としての「琉球併合」と捉えようとする議論。
- (93) 保元の乱に敗れた源為朝は配所の伊豆大島で死んだ。しかし伝説によると、為朝は伊豆大島を脱して沖繩本島の運天に至り、そこで設けた子の舜天が琉球最初の王となったという。このことは一七世紀には王府の正史『中山世鑑』(前掲注84参照)にも採用され、広く信じられるようになった。
- (94) 日本・沖縄の文化的・人種的同一性を強調する日琉同祖論は、『中山世鑑』の編者であり、摂政の地位にあった羽地朝秀(向家賢、一六一七〜七五年)が提唱したとされる。このような考え方は、明治以後、言語学者のチエンパレンや人類学者の鳥居龍蔵によって受け継がれ、伊波普猷によって全面的に展開された。伊波は近代の人文科学の手法を駆使し、「琉球民族」は「大和民族」の分枝であることを証明しようとした。
- (95) 羽地朝秀(はねじ・ちようしゅう、一六一七〜一六七六)唐名・向家賢(しょう・じようけん)。琉球王国の歴史家、政治家。一六五〇年、琉球最初の正史『中山世鑑』を編纂。一八六六年に琉球王国摂政の地位に就く。摂政としての布達が「羽地仕置」として残っている。
- (96) 小風秀雅「華夷秩序と日本外交」琉球・朝鮮をめぐる一「明治維新史学会編『明治維新とアジア』吉川弘文館、二〇〇一年。
- (97) インタビュー当時。藤間生大は二〇一八年二月に一〇五歳で逝去した。
- (98) 在番とは、首里王府により特定地域に派遣された常駐官。宮古在番は一六二九年、八重山在番は一六三二年にはじまり、琉球処分まで続いた。古琉球時代における先島の間接統治を直接統治へと切り替えた象徴的な制度といえる。
- (99) 『沖繩大百科事典(中)』(沖繩タイムス社、一九八三年)によれば、在番の任期は当初一年任期、のち二年任期とある。
- (100) 石垣島の中心である登野城・大川・石垣・新川の四ヶ村の総称。
- (101) 西塘(にしとう)は、一五世紀末に竹富島に生まれ、首里王府に仕えて建築事業に力を発揮したという。一五二四年に帰郷し「竹富首里大屋子」として八重山を支配した。
- (102) 宮古・八重山・久米島に設置された首里王府の島嶼支配拠点。
- (103) 竹富島の種子取(タナドワイ)は毎年旧暦九〜一〇月に一〇日間わたって催される農耕神事であり、多彩な奉納芸能で知られる。国の重要無形民俗文化財に指定されている。
- (104) 奄美大島をはじめとする奄美群島の総称で江戸時代に用いられた。奄美はもと琉球王国の支配下にあったが一六〇九年の島津氏の琉球侵攻の後、薩摩藩の支配下に置かれるようになった。近代以後も鹿児島県に属するが文化的には琉球要素も根強い。
- (105) 日本列島をポリネシアやミクロネシア、メラネシアなどに連なる太平洋上の島の連なりとして捉えようとする概念で、作家・島尾敏雄が一八九〇年代に提唱した。
- (106) 西里喜行「ロバート・パウン号事件とその周辺——東アジア国際秩序の試練」(『清末中琉日関係史の研究』所収、論文初出は二〇〇一年)。
- (107) 米国の苦力貿易船ロバート・パウン号が一八五二年、石垣島に漂着し、中国人苦力が上陸した国際的事件。五年二月、中国人苦力四一〇人を乗せた同船は厦門(アモイ)からカリフォルニアに出向したが、台湾沖で苦力が暴動を起こし船長らを殺害、二月十九日、船は石垣島沖合で座礁し、中国人三八〇人、米人一人が上陸した。英米艦船が二度にわたって石垣島に上陸し八〇人の苦力を逮捕した。五年九月二十九日、琉球の護送船二隻で七二人を石垣島から福州に護送した。滞在中、自殺・餓死・被弾などで二八人の苦力が死亡した。一九七一年、石垣市観音崎に唐人墓が建立された。
- (108) 一八七二年、横浜に入港したマカオ発のペルー船籍マリア・ルス号から中国人苦力が脱走して救助を求めた。日本政府の臨時法廷は移民契約自体の無効を宣し、乗り込んでいた二二九名を清国当局に引き渡した。ペルー政府はこれを不服として日本政府に損害賠償を求めたが、仲裁に当たったロシア皇帝アレクサンドル二世は日本側に責任なしの判断を下した。この事件を契機に日本国内でも人身売買が禁止され、いわゆる苦力妓解放令が布告されることになった。
- (109) 一六四四年に明朝が滅んだ後、明の皇族によって一六六一年まで華中・華南に建てられた亡命政権の総称。
- (110) 一八五一年、広西の在野知識人洪秀全が起こした反乱。太平天国を称して一時は華中、華南の広い範囲を支配下に置いたが、清朝およびイギリスなど列国の攻撃に加え内部抗争によって衰え、一八六四年に滅亡した。
- (111) 近世琉球史研究の渡辺美季(東京大学准教授)によれば、一七世紀以後の琉球が中日両国への臣従を貫きながら、その矛盾を自国にとって最も整合性を持つように調整することで、自律的な国家運営を維持したとする。このような渡辺の議論のキーワードの一つが「狭間」であり、琉球が中日両国の狭間に置かれているという条件を主体的に活用したことが強調される。渡辺美季『近世琉球と中日関係』吉川弘文館、二〇一二年参照。